

ロスコー・パウンドのプラグマティズム法学 ——植物学研究から法学研究へ——

岡 寄 修

- I. 近代植物学の黎明期：分類学から生態学へ
 - パウンド研究の「ミッシング・リンク」
 - 大衆の博物学熱と近代植物学
 - 師チャールズ・ベッシーの植物学
- II. 植物学者ロスコー・パウンド：ネブラスカ大学 PhD 第 1 号
 - 英才教育
 - 書評：オスカー・ドルーデ著「ドイツの植物地理学」
 - PhD 論文「ネブラスカの植物地理学」
- III. 植物学者から法学者へ
 - 「機械論的法学」に見る植物学研究の影響
 - 法の生態学
 - プラグマティズム法学：形式主義への反乱

I. 近代植物学の黎明期：分類学から生態学へ

パウンド研究の「ミッシング・リンク」

20 世紀アメリカの法学者として名を馳せたロスコー・パウンドは、南北戦争後、アメリカの資本主義が急速に発展し産業社会へと向かう中において、時代の変化に見合った社会変革を求める革新主義の立場から、法学におけるプラグマティズムを提唱した人物として知られる。彼は、ホームズ裁判官と並び称され、法学者として精力的に活動し、数多

ロスコー・パウンドのプラグマティズム法学—植物学研究から法学研究へ—

くの著作を残すとともに、ハーバード・ロー・スクールの学長も務め、晩年には5巻からなる大著『法学 Jurisprudence』を著すなど、数々の功績を残した。

アメリカ独自の哲学と言われるプラグマティズムは、チャールズ・ダーウィンの進化論思想の影響を受け、西洋哲学の伝統的な知識観に反旗を翻したものである。19世紀末の「形式主義への反乱」と称される大規模な知的動向の中で、新たな動きとして登場したプラグマティズムは、合理主義哲学の伝統に対し、真理それ自体を崇めるべき対象とはみなさず、生存闘争を生き抜くための有用な道具のひとつとして捉え、生存をより確かなものにするのに役立つこそ意味があると考えた。ここから、「真理=有用性」と見るプラグマティズムに特有の真理観が展開される。

パウンドは、アメリカに独立当初から根強くあった自然法思想やオースティンの分析法学をアプリオリズムとして批判し、プラグマティズムのアイデアを法学の中に持ち込んだ。真理が生存のための有用な手段であるのと同じように、パウンドは、法もそれ自体を目的とすべきものではなく、より良き社会を実現するための有用な手段とする見方を展開した。パウンドがこの見解を明確に示したのが、1908年、「コロンビア・ロー・レビュー」誌に発表した「機械論的法学 Mechanical Jurisprudence」という研究論文である。彼はその翌年、「イェール・ロー・ジャーナル」誌に「契約の自由 Liberty of Contract」を著し、合衆国最高裁が *Lochner v. New York* 事件において、合衆国憲法第14修正を楯に「契約自由の原則」を絶対化する「実体的デュープロセス論」を展開したことを批判している。

プラグマティズムという思想が生まれたのは、19世紀末にボストンの一角にあった「メタフィジカル・クラブ」と呼ばれる会合からである。そこにはジョン・ライト、ニコラス・セント・ジョン・グリーン、ウィリアム・ジェイムズ、チャールズ・パース、オリバー・ホームズな

ど、ボストンの若きエリートたちが顔を合わせていた。ホームズはこの会合のメンバーで、パウンドより早く法のプラグマティズムを唱えた人物として知られる。

パウンドはネブラスカ生まれで、彼らよりおおよそ一代若かったし、「機械論的法学」においてプラグマティズム法学を提唱したことは、彼がジェイムズの本を引用していることもあって、このクラブの影響によると思われるがちである。だが、このクラブの会合は小さくて地味であった上に、さほど長く続いたわけでもなかった。若きパウンドも、ジェイムズらと直接の接点を持っていたわけではなく、彼らからその発想を直接に得たわけではないだろう。したがって、パウンドが法学におけるプラグマティズムを唱えるに到ったのは、独自のルートを通じ、19世紀末頃にはそれに通じる考えを会得していたものと推測される。

今日、パウンドがその名を知られるのは、もっぱら法学者としてである。だが彼は、法学研究を行う前、ネブラスカ大学の学生になった1884年から世紀末まで、当時における最新の植物学研究を精力的に行っていた。それはちょうど、19世紀半ばまで植物学が博物学の一角を占めていた時期から脱し、ダーウィンの進化論の影響を受け、形式主義への反乱が拡大する中で、生物学の一分野として近代的な植物学へと転じる時期に該当する。だが、この植物学研究に熱を入れていた時期のパウンドについては、今なおほとんど研究がなされていない状態にあり、そこで彼がいかなる研究をしていたのかは不明なため、これがパウンド研究における「ミッシング・リンク」とも言える様相を呈している。

一般に、名高い法学者が若き日に植物学研究を行っていたと聞いても、法学で名を馳せているだけに、畑違いの研究など素人芸の域を出るものではないと思われるがちになる。だが、パウンドの植物学研究を垣間見れば、それは彼が法学者になる前に並はずれた熱の入れようで行っていたもので、およそ趣味の範囲に留まるようなものではなかった。彼がこの植物学研究によって PhD を得ていることを考えれば、これが後の

ロスコー・パウンドのプラグマティズム法学—植物学研究から法学研究へ—

法学研究に何の影響も及ぼさなかったとは考え難い。

ドイツ語にも堪能であったパウンドが、ドイツの影響を受けていたことは読み取れるが、それがオスカー・ドルーデの植物学研究を通じて始まったことは、ほとんど知られていない。ドルーデの植物学は、当時における最新の科学研究であって、パウンドが植物学で博士論文を書く際にそのモデルとしている。

本稿では、パウンドの植物学における専門的研究には立ち入れないので、それを概観するに留めるとともに、ヨーロッパにおいて近代植物学研究が、19世紀後半に生物学の一分野として博物学から独立するに到った状況を辿り、ネブラスカ大学において学生であったパウンドが、植物学者チャールズ・ベッシーとの出会いを通じて行った研究が、この新たな植物学研究の最前線に位置するものであったこと、さらにパウンドが法学研究に転じ、「機械論的法学」において法のプラグマティズムを提唱するに到った経緯を辿る。これを通じ、パウンド研究における「ミッシング・リンク」たる植物学研究と、後に彼が提唱したプラグマティズム法学の基本的構想との間に、かなり密接なつながりのあることが見えてくる。

大衆の博物学熱と近代植物学

ヴィクトリア朝のイギリスでは、大衆の間に博物学熱が殊のほか高まっていた。物を集めるといふ性癖なら、今でも好事家の間には病的なまでに高まるケースも見られるが、大衆の博物学熱もさほど学問的な動機に裏づけられていたわけではなく、時代の流行に乗り人びとの間に広く拡散したものでしかなかった。

ルネサンス以後、ヨーロッパでは探検航海が盛んに行われるようになった。「大航海時代」とも呼ばれる時期には、新たな種や珍奇なもの¹の収集熱が高まった。それは、探検航海などで世界に乗り出したヨーロッパ人たちが、それまで知らなかった珍しい品々を世界各地から持ち帰

り、珍品の一大収集が流行するようになったためである。時代が19世紀になると、リッチになり暇ができた一部の大衆の間にまでこの傾向が及ぶようになった。彼らの間では、これが一種の熱病のごとき様相を呈し、それを理に適った一種の高級娯楽ともみなすようになる。

[ヴィクトリア朝のイギリスにおける] 大衆の博物学趣味ほど帰趨見極めがたいものはなかった。ある年に地衣類に夢中になるかと思えば、次の年にはもうイシサンゴに狂奔している。1845年からの十年間に人々の興味は海藻からシダへ、シダからイソギンチャクへと転々とした。次の十年間にそれは唐突に海蛇へ、ゴリラへ、そして浸滴虫へと移っていった。これらすべて一国民規模の熱狂であったが…こうしたいかにも短命な趣味や熱狂の底流には、1820年代から1860年代にかけて年々歳々、そのあらゆる部門にわたっていやましに度を増していき…それこそあらゆる社会階層を魅了したもっと根深く、もっと息長く不易の、博物学への熱狂というものがあつたのである。ヴィクトリア朝の娘はだれしもシダやキノコの名の20くらいはすらすらとすることができた風だし、聖職者たちはみな『セルボーン²の博物誌』のギルバート・ホワイトのひそみに倣って自分の教区の博物誌を一冊の本に纏めて出版したいという秘かな思いを抱いていた。

識字率はまださほど高くなかつたし、博物学では視覚への訴えが積極的に行われたため、ヴィクトリア時代の博物学書では、カラー写真のごとき見事な色刷りの挿絵が流行した³。この時期に大衆の間で博物学熱が高まつたことは、この種の博物学関連書が次々と出版されたことも一因とされる⁴。

当時のアメリカに目を転じてみれば、ヨーロッパと比べ学問的にもまだ後進国の地位に甘んじていた。そのアメリカにおいて、当時、著名博物学者として名を鳴らした人物がルイ・アガシー（1835-73）である。彼は、アメリカの科学の名声を高めるべく、ヨーロッパからハーバード大学に大物教授として招かれた人物で、派手な言動で物議を醸したこともあつたが、『分類論』を著すなどして活躍し、地質学から比較解剖学

ロスコー・パウンドのプラグマティズム法学—植物学研究から法学研究へ—

までをカバーしていた⁵。ダーウィンの進化論の批判者としても知られる彼がアメリカに渡ったのは1846年、これでアメリカ科学界が成人式を迎えたと言われるのは、それまでアメリカの研究書がヨーロッパでほとんど出版されず、ヨーロッパの博物学者との間の交流もないという惨憺たる状況であったためである。アガシーは、自らハーバード大学内に比較解剖学博物館を創設し、アメリカ科学界の声を代弁する形で大いに貢献したため、アメリカもヨーロッパの知的ネットワークによく組み込まれることになった。

だが19世紀半ばには、アメリカでもイギリスでも、博物学専門家の研究は、大衆の博物学熱とは別の方向に進みつつあった。それは、この頃から科学の専門研究が独自の道を開拓し、相応の成果を上げるようになったためである。

英米では多くの学問分野において、それまで神学の伝統が根強く残っており、博物学も神による天地創造という聖書の背景の中で捉えられてきたが、科学が盛んになると、生物学が博物学から新たな科学として独立し、植物学もこの生物学の一部門として新たな研究手法の下で展開され始めた。パウンドがネブラスカの学部時代に学んだ植物学は、この動きの先端にあった博物学である。

キリスト教信仰の下では、神が天地をはじめとする万物を創造したとされる。このため、大航海時代以後の新種や珍品の収集も、単なる好事家の趣味によるものではなく、世界の隅々から万物を集め、天地創造の際に神が創り給うた万物のカタログを作成するという、信仰に直結する動機に促されていた。18世紀以後、博物学の領域で名声を博したスウェーデンのカール・リンネの植物分類も、その典型例である。リンネは、『自然の体系』において、その後の分類学のモデルとなる植物分類法を示し、その後、この分類法はリンネの名とともに一世を風靡するに到った。彼が植物に関して行った分類法の影響は、植物学の域に限られることなく多くの方面に影響を及ぼした。

動物・植物・鉱物の三界を通じて、自然物のそれぞれのランクのすべてにきちんと命名し、かつそれらを整然と配列して、ピラミッドのように秩序だったヒエラルキーに体系づけること——これがリンネの野心だった。しかも、それを世界中のすべての動植物に及ぼし、全地球的な規模で展開すること——それが彼の目標となった。まさに大事業と称すべきだろう。しかも彼はそれをおのれ一人の力でやろうとしたのであった。世界の自然の解明がようやく緒についたばかりの時代、そして、学問がまだあまり細分化されていなかった当時であっても、これは超人的な力業といわねばなるまい。彼のその大目標とそれへ向けてのたゆまぬ努力を支えていたのは、純粋に学問的な関心・意図ばかりではなかった。世俗的な名譽心、そしてなによりも熱烈な宗教心から発した彼の強固な意志ないし敬虔な信念にもとづくものであった⁷。

リンネは、三界をすべて視野に入れ、神による創造のカタログを作ることに力点を置いたが、彼の考案した植物の分類と命名の仕方が専門家のみならず広く大衆の間に人気を博したのは、その壮大な構想とは裏腹に、これが素人にとっても簡便であったためだという。リンネが植物分類で行ったものは、二命名法と呼ばれるもので、「属」と「種」の組み合わせをラテン語で表記することを以て植物名とするやり方であった。これは、高度な知識を持つ専門家でなくとも、新種の命名が容易にできたし、場合によっては自らの名をそこに込めることもできた。こうした簡便さが、リンネの分類法を通じ、19世紀には大衆の間に博物学の人気が白熱するに到った理由の一つである。

[リンネの植物分類は] 雄しべと雌しべの数と配置に注目して植物を分類し、体系づける。数ある分類形質のなかから雄しべと雌しべだけをとり出し、しかもその数をかぞえるのみで網と目とを一義的に判定するというのだから…はるかに機械的であり、簡単である。そして…高度に人為的な分類体系だった。だが、余計なことは考えなくてもよい機械的で単純な方法であるがゆえに、それは植物のことをなにも知らない初心者にも容易に

使いこなせる体系だったのである。…リンネの新しい植物体系の学説が短期日のうちに、それも一般大衆をも巻き込みかたちで広く受け入れられるにいたった理由は、まずもって、だれもが使いこなせるというこの簡便性⁸にあったことは、疑いないところだろう。

分かり易いということは、素人が理解する上で都合がよいということで、それが必ずしも学問的な正確さや厳密さに寄与するものとは限らない。しかも、リンネの分類法は、子葉の数や花冠の形などには目を向けることなく、ひたすら雄しべと雌しべの数と配置にだけ眼を向けた。このため、複雑な自然的分類システムは、それよりずっと高度な知識を必要としたが、これとは対照的に、リンネの分類法は、機械的で簡便であった反面、高度に作為的で人為的な性格を持つものになった。このため、他の要素を排除して一要素だけに注目する分類法は、専門家の間で、とりわけ自然的分類システムを重視する博物学者の間で、それに対する批判を強める一因にもなった。

リンネが、これほど雄しべと雌しべだけに執着した背景には、当時、それに注目する相応の理由があったという。

17世紀の終わりから18世紀のはじめにかけて、それまで機能のよくわからなかった花の雄しべと雌しべ——もちろん、当時はこれらが生殖に関係する構造であるという認識はまったくなかった——が、じつは、植物の雄性および雌性の生殖器官にほかならぬことが明らかにされ、予想もされなかった新発見として博物学者たちに大きな衝撃を与えた…。この発見によって、植物にも動物と同じような受精の現象があること、有性生殖をおこなって子孫を残すという点では植物も動物もまったく変わりはないことが、はじめて判明したのであった。…ここから彼〔リンネ〕はストレートに考えを展開させて、この受精に関与する雄しべ・雌しべの構造こそ、植物の分類にさいして第一に重要視すべき形質であるとの結論を得たのであ⁹った。

現在では、動物にはもちろん、植物にも雌雄の両性があり、それぞれが有性生殖を通じて繁殖・増殖することは、生物学上の知識として、半ば常識の部類に属するものになっている。だが、リンネの時代には決してそうではなっただけに、この発見が博物学者には大きなショックを与えたという。だが、この有性生殖という観点に立てば、ことさら動物と植物とを区別する必要はなく、そのいずれも共通する機能を見出したことになる。このような背景の下に生殖・増殖という一点に注目しながら、そのための器官を通じて植物を分類するという発想を実際に展開してみせたのがリンネであった。

しかも、リンネの分類に関する発想の根本には、産めよ増えよ地に満ちよという聖書の教えが絡んでいる。神はこれを実行するために、動物・植物を問わず、いずれにも共通の増殖機能をお与えになった。動機がどうであれ、リンネは、こうして素人にも分かり易い斬新な植物分類法を編み出した。その後、リンネのこの分類法には、専門家の中でその人為的な性格への批判が高まってゆくのと対照的に、素人の間では、その親しみやすさ簡便さのゆえに、これを基礎に博物学が大いにもてはやされることとなった。

リンネの人為的植物分類に対し、専門家の中で次第に批判が高まったのは、その背後で、18世紀末には学問の動向として実証主義的精神が強まり、事実の詳細な観察を通じた裏づけが求められるようになったためである。

18世紀の70-80年代には… [リンネの〈性体系〉のような] 大理論をもてあそぶ時代はすでに終わった。大理論よりももっと確実な事実の発見と解明に力をつくすべきであるという風潮が学界に次第に定着しつつあった。つまり、現代までその影響が及んでいるところの科学の実証主義¹⁰はいわゆる"近代科学化"が着々とその橋頭塗を築きつつあったのである。

18世紀末にこの動きが顕著になった背景には、フランス革命に促され、この時期のフランスで、とりわけ博物学の分野で、全ヨーロッパをリードするような活発な動きが展開されていたことがある。フランス博物学の黄金時代と称されるこの時期を経て、博物学はそれまでのものとは研究スタイルを変え、次第に近代的で実証主義的な生物学へと発展して行く。そこには、それまで近代科学が隆盛する中で、その発展の原動力として大いに寄与してきたエリート的存在のニュートン力学と、それに対抗しながら、いわば日蔭の存在ともされてきた博物学との間の、大いなる軋轢があった。

[フランス革命下で、] 博物学という学問に対して当時の人々が抱いたある奇妙な観念も関与していたことを見落としてはなるまい。…旧体制下のフランスの学界で特権的な羽振りをきかせていたのは、ニュートン科学——その中核をなすのは数学と力学——だった。数学と力学にくらべると、博物学は当時はまだ——少なくとも学問の世界においては——影響力が弱く、周辺的な学問といってよかった。それが、リンネの出現、そしてビュフォンの活躍によって博物学は社会に対して次第に重きをなすようになり、18世紀の後半にはその立場が逆転しかねない有様にまでなっていく。そして、革命の時代に突入するや、数学や力学は非大衆的、エリート的=貴族主義的学問であり、一方、博物学こそ平民的=平等主義的学問の代表であるという考えが、民衆、とりわけ革命家たちのあいだに一挙に広¹¹まっていったのである。

フランス革命の余波により、学問に対してもこのような貴族対平民という対立図式の影響が及び、後に博物学が大衆の学として受け容れられる下地を準備する一方で、専門家の間には実証主義的な研究に向けた道が整えられた。後にパウンドが行う近代的な植物学も、博物学とは袂を分かち、19世紀にこの専門の科学的研究の中から誕生することになった¹²ものである。

師チャールズ・ベッシーの植物学

南北戦争後のアメリカで、近代植物学研究への道を切り開いた功労者の一人が、ネブラスカ大学でロスコー・パウンドに植物学を教えた、チャールズ・エドウィン・ベッシー (Charles Edwin Bessey, 1845-1915) である。ハーバードのエーサ・グレイの下でも研鑽を積んだ彼は、19世紀末にはアメリカにおいて植物研究の第一人者になった。「アメリカ植物学会 Botanical Society of America」のホームページには、彼の名を冠して「エドウィン・ベッシー教育賞 The Charles Edwin Bessey Teaching Award」が掲げられており、¹³ 彼がネブラスカ大学に移ってきた1884年から没年の1915年までは、「ベッシー時代」とも呼ばれている。

チャールズ・ベッシーは、1845年オハイオ州ミルトンに生まれ、北東オハイオの農場で幼少時を過ごした。彼がミシガン農業大学を卒業したのは、ダーウィンの『種の起源』が出版されて10年後の1869年である。1872年に同大学で科学修士号 M. S. を取得すると、その後数年間、グレイの下で研鑽を積み、その後1884年までアイオワ農業大学で植物学教授を務めている。¹⁴

当時のアメリカでは、大学教育が新たな科学研究へと向かう変革期にあった。1884年にネブラスカ大学の学長に就任した改革派のアーヴィング・マナットは、ネブラスカ大学を実り豊かな科学研究の場とすることを狙い、¹⁵ 全米から有能な科学者を引き抜いた。その中に名を連ねていた一人が、植物学教授としてアイオワ大学から招かれたベッシーである。移籍後の彼は、アメリカの植物学研究が大きく変化・発展する中で多大の貢献をし、「アメリカ植物学会 (BSA)」創設メンバーの一人として初代会長を務め、後には「アメリカ科学振興協会 (AAAS)」の会長にも就任している。

ロスコー・パウンドが弱冠14歳にしてネブラスカ大学に入学したのが1884年、ベッシーがネブラスカ大学に招かれたまさにその年のことである。パウンドは、この時以来、ベッシーの下で植物学研究に励み続

ロスコー・パウンドのプラグマティズム法学—植物学研究から法学研究へ—

けた。二人の結びつきは年を重ねるごとに強まり、ベッシーはパウンドの生涯において最も大きくかつ永続的な影響を与える人物になった。¹⁶

南北戦争直後、ベッシーが植物学研究を始めた時代に、アメリカでも圧倒的な支配力を誇っていたものは、もちろんリンネの植物学である。この中でベッシーは、リンネ流の分類一辺倒の研究に対し大きな抵抗感を抱いていた。

ベッシーが植物学者になった時代は、植物研究が未だ観察の段階にあり、分類学があらゆる研究の至高の目標になっていた。その中で、ベッシーと彼の同僚は、分類にばかり没頭する研究には批判的で、実験に基づく科学として植物学を打ち立てることに熱を入れていた。植物の外部構造への関心を越えたところには、植物生理学 physiological botany と植物病理学 plant pathology という未踏の分野が広がっていた。この「新植物学」に含まれるものは、植物を成長と発展の能力を備える生きた対象として捉える見方である。これは、それまでの静的な科学や科学的探究の観念を、動的な観念に置き換えるものであった。

この新植物学は、ダーウィンの仮説が生み出した広範な知的革命と軌を一にしていた。進化という理論に啓発された植物学者は、植物を集め、既存の枠に嵌め込んで分類することでは満足しようとしなかった。ベッシーは、ダーウィンから強い影響を受け…抽象的な諸原理の探求を行うより、植物の生態に潜む社会的効用を研究する方を好んだ。¹⁷

植物を収集・観察し、それらを既存の枠内に分類するという作業は、博物学が最も得意としてきたものである。当時のアメリカで植物学の第一人者として名高かったエーサ・グレイの植物学研究にもこの傾向が反映され、¹⁸そこでは経験より思索の方が重視されていた。ベッシーは、グレイの研究の下で研鑽を積みながらも、頭の中で考えるより実験や経験の方が重要であるという考えを捨てることなく研究を続け、後に植物学研究でアメリカ初の顕微鏡を用いた実験室も作っている。だが、当時の同僚には、それが化学をまねたやり方として甚だ不評であったという。¹⁹

これは、ヨーロッパでも新たな植物研究が始まってほでない時期であったため、植物をスライスしてプレパラートに置き、顕微鏡を用いてその細胞をつぶさに観察するようなやり方は、容易には受け容れられなかったことを物語っている²⁰。

ダーウィン以後の時代なら、自然な体系は系統発生、即ち生物の進化の歴史を反映するものともなったわけだが、もちろんリンネの同時代にはこんな発想はなかった。…リンネと彼の同時代人たちはアリストテレスやトマス神学を基礎に、自然の中には或る大構想が存在するのだという発想に立っていて、それが彼らの分類学に反映されることを願っていたのである。自然の全生命は、むろん頂点に人間を仰ぐ、最下等生物から最高等生物へと昇っていく一本の梯子、「自然の階段」もしくは「存在の大きいなる連鎖」を構成している。生物の外形にはその生物の「本質」が——神がそれをお創りになった時、脳裡にあったその生物の完全無欠の原型のアイデア——が示されているはずなのだ。…[リンネは]特殊創造説と種の不変を堅く信じていた²¹…。

分類に勤しむ背後に、神々しい世界の詳細な記述を通じ、そこに込められた神のメッセージを読み取ろうとする熱意が控えていた時代には、実験やフィールドワークなどの研究スタイルは、まともな研究方法とはみなされず、邪道も同然の扱いを受けていた。エビステーメは経験に訴えない瞑想を通じてこそ得られるものであり、経験を頼りにするやり方では、浅はかなドクサシしか得ることはできない。したがって、その研究スタイルは、観察を通じてデータを集積する点では科学の手法にも似ていながら、その発想は閉じた体系を目指しており、データの集積を通じ未来に向けて発展的に知識を累積・拡大してゆく考えには馴染まなかった。リンネ流のスタティックな植物学研究は、あくまで論理体系に基づく閉じた世界を想定したものであって、未来に向けて発展し続ける開かれたダイナミックな世界を想い描くものではない。それは古来から受け

継がれた本質論と存在の連鎖という観念の延長線上に位置しており²²、ダーウィンの進化思想の影響を受けたベッシーの植物学とは大きな隔たりがあった。当時は、学問的な意味で野外研究を重視する姿勢は、ヨーロッパにもほとんどなかったという。

ダーウィンの進化論の出現まで、野外研究を是としてくれるような理論などひとつもなかったのである。19世紀前半の生物学はあげて種の命名、特定、分類に精魂を傾けていたのだが、これは完全に室内派の得手とする世界だった。生きている動植物など面倒の原因になるだけだったし…それ自体の楽しみのため、また一般大衆を娛ませつつ教えようとする本を書こうとして、生きた動植物を観察しようとした好事家、啓蒙書の著述家は決して少なくはなかったのに、これは「まともな」科学ではないのだという感じがいつの間にか深く根づいていた。…19世紀前半全体を通して博物学²³のとりパターンを決定づけたのは…リンネであった。

室内派にして瞑想を重んじるリンネ植物学にとって、そもそもフィールドワークは不要である。これが研究に採り入れられるようになったのは、ダーウィンの進化論の影響を受け、生物進化にとって生存闘争における環境への順応・適応の重要性が認識されるようになり、その結果、動植物に関する研究が、それまでの瞑想や思索から、外部環境との関連性に向けて拡大され、生態学の意義が認められるようになってからのことである。室内派であったエイサ・グレイと、その下で研鑽を積みながら、植物学研究のラボを作ったベッシーの植物研究の間に、この違いが示されている。

ベッシーは、ダーウィンの影響を強く受けて植物学研究に向かったが、彼は必ずしも分類を疎んじていたわけではない。1893年、彼が「進化と分類」と題した講演において、「植物学的知識は、すべて、最終的にはある種の分類においてその頂点に達する」と述べている²⁴。だがこれは、彼が旧来の博物学における瞑想重視の研究方法を、そのまま踏襲す

ることを意味するわけではない。彼の研究姿勢は、植物を標本作りに相応しいものとして扱うのではなく、それを生態学的な視点から捉え直し、植物とそれを取り巻く周囲の状況との関係に目を向け、植物研究を系による分類・秩序づけとして展開することを目指した。

〔生物の組織構造を研究する〕組織学 histology, 形態学, 生理学に関する諸々の事実は、きわめて生物学な重要性を持つものであるが、これら生物学的事実の中で最も重要なものは、世界が生き物によって占められているという事実にある。われわれは、植物学の組織学的事実を、一連の秩序だったものにグループ分けし配列する。形態学者が発見した事実についても、同じようなことをするし、既知の生理学的事実も分類を行う。だが、これらのことを超え、一切のものに関してなされる最大のグループ分けは、生き物それ自体を秩序だった系とすることにある。われわれが学ぶものは、この系の組織学であり、形態学であり、生理学である。

進化し続けてきた植物を、系統のもとに秩序づけることを目指すベッシーの植物研究は、生殖器官の特徴に注目し、植物の人為的分類体系を確立したリンネとは、視点を大きく異にする。ベッシーは、植物学において、植物は標本ではなく、生き物として位置づけられ、環境の中でそれに左右されながら生きるものという視点に立ち、生態学、生理学、病理学、地質学、気象学、地理学までも研究領域に入れた、ダイナミックな植物学を樹立しようとした。それは、人間を研究するにも、まずヒューマン・ネイチャーの定義から始めるのではなく、猿類とのつながりに注目することから始めることとの違いにも似て、単に旧来の博物学とは研究手法が違うというだけに留まらず、その視点を根本的に異にするものである。

ベッシーは、いわゆる新植物学研究の先頭に位置していた。この「新たな」植物学者たちは、繰り返し次のように主張した。…植物学は、もはや

周囲にある植物名を当てるような安易な娯楽であったり、死せる植物を押花や標本として台紙に貼り付けるだけのものではならぬ。植物学の発展は、今や実験という研究方法に基づくものにならねばならない。また、この新植物学は、研究を分類することに限定してきたそれまでの偏狭な姿勢を打破しようとした。ベッシーは…高等植物の研究を、もっぱら外部形態を観察し、種の確認と命名に限るような、伝統的手法を拒否した。…ベッシーにとって、植物は生き物であり、それは食物を取り入れて成長し、感情を持って増殖し、周囲の環境からの影響を受け…傷を受けたり病気になるれば苦しむ、そういう存在であった。かくして19世紀末には、生理学、病理学、生態学、植物地理学が、エキサイティングな新領域として開拓されるに到り、植物学はその探求領域を拡大し、研究者たちの知性がこの新領域に挑むことになったのである。²⁶

植物が傷つき病に苦しむとはいえ、それはいたずらに情緒趣味で植物を観察することを意味しない。それは、博物学においては、生きていながら「死せる標本」として扱われた植物を、細胞による生命活動を営んでいるものとして改めて捉え直すことである。これにより植物学は、それまでの博物学から隔てられた近代科学へとその装いを改めることになった。

暇人の趣味として博物学に熱を上げる大衆には、リンネの植物学が大もてしていた裏で、専門の植物学研究は、それまでの博物学としての静的な植物研究から、新たに解剖学、生理学、病理学、生態学、地質学、地理学、気象学、発生学などの分野をを加え、生物学の一角を占めるダイナミックな植物学に向け、大きく変貌を遂げつつあった。

今日、「生物学」という言葉は、高校の教科で誰にも馴染みのものになっている。だがこれは、どこでも自然のうちに博物学の延長として登場したわけではなく、19世紀初めのヨーロッパにおいて、ヨーロッパだけに、博物学とは袂を分かち形で現れた、画期的なものであったという。²⁷

動物・植物を、陳列室内の死んで干からびた標本についてではなく、生の過程において——すなわち、生きている状態で、もしくはあるがままに——観察し、実験し、そして解析して生命の秘密に迫ろうとするこの研究路線は、その後 [19 世紀に入り] いっそう加速されることとなった。1838-39 年に、シュライデンによってまず植物で、ついでシュヴァンによって動物において樹立された細胞説は、そうした新しい生物学研究の達成したもっとも輝かしい成果のひとつだった。動物も植物もともに細胞という形態学的ならびに生理学的な単位から構成されているという、この学説の樹立こそ、西ヨーロッパの博物学-生物学を確固たる近代科学として定礎した、記念すべき業績²⁸といってよいだろう。

博物学が対象としてきたものは、同じ生き物たる動植物ではあっても、それらを決して生けるものとして扱ってはいない。たとえそれが見事な極彩色の図版に生き生きと描かれていても、それはあくまで剥製であったり死せる標本の類としてであって、生きているものや生命活動そのものとしてではない。したがって、それに相応しい装いを与えれば、それは博物館の陳列棚に居並ぶ剥製や標本となる。

ここから近代生物学に向かう一步を踏み出す上で、重要な切っ掛けを与えたものが、およそ生き物は動物であれ植物であれ、それらが細胞という単位から成る生命活動を営んでいることに着眼したことにある。その背景には、生物をもっぱら機械論的な視点で見ることを控え、それを生態学の視点から見直すことが絡んでいる。

植物を個々の植物ではなく植物群として捉え、それがいかなる土壌や気候の下で生育しているのかを研究対象とするには、古典力学をモデルとする機械論ではなく、生命活動に特有な原理を見据える生氣論と、生態学的な視点が入り込んでくる。植物をアプリアリに想定された人為空間で観察するのではなく、あくまで常時変化に晒されながら、特定の状況下で生育し、開花し、繁殖する状況の中で観察する。周囲時の状況が変化すれば、当然、それが植物の生育や繁殖にも大きな影響を及ぼす。

この生態学的視点をもたらしたものは、周囲の環境に適応できるものだけが進化を通じて生き残ることを示唆した、ダーウィンの生物進化論である。生物種が、周囲の環境変化に適応しようと努力し続けることが、新種の誕生につながる大きな要因であるとするれば、生物種の研究は、それを取り巻く環境との関係を重要な研究対象とせざるを得ない。植物群の観察に加え、それが生育している土壌や気候が、その植物の生育に重大な影響を及ぼす。このため、生育地の地質学的要因に加え、さらに生理学、病理学、気象学的要素もその重要な研究対象に含まれるようになった。

ベッシーは、この斬新な視点を導入し植物学研究を展開していた。それは、センチメンタルな素人的ナチュラルリストの野外観察とは一線を画し、その後の植物学研究の方向性を先取りする専門的な科学研究である。²⁹ベッシーは、リンネの高度に人為的な性体系が18世紀末から批判に晒されるプロセスを脳裏に描きながら、なおそれが19世紀後半にまで根強く残り、新植物研究の展開を阻んできた原因の一つとして、保守的な考え方の根強さを批判している。³⁰

科学者を自認していたベッシーは、1881年に出版した『ハイスクールとカレッジの学生のための植物学』の序において、その狙いを次のように述べている。

本書は植物研究の入門書として役立てられることを願って書いたものである。本書だけで、植物界を完全に説明できるわけではないが、その概略を示す目的には十分役立ってくれるだろう。…本書では、学校の内外で自由な教養科目 a liberal culture の一分野として、植物界の上位部門や下位部門に植物を分類することばかりでなく、植物の組織に関する知識一般を習得したいと願う数多くの人々がいることにも留意した。こうした学生たちや一般読者は誰でも、本書で述べたことを通じ、植物組織に関する限りではあっても、現在の多くの生物学上の文献をより良く理解できるようになるだろう。本書は、この研究をさらに進めたいと思う者が…自ら観察者・

探求者となって、植物の解剖学と生理学の知識を自力で直接習得できることを目指している。…本書は、概略的なスケッチを補う教科書として、実験室に常備するのが相応しいものになったが、学生諸君はそれぞれ、メス³¹と複合顕微鏡を活用し、これを補ってほしい。

本書のタイトルが示すように、これは新しい世代の若者を対象に、植物学の手ほどきを目指したものである。博物館で迫力に満ちた動物の剥製を見る際には、メスも顕微鏡も必要ない。だが、旧来の博物学で育くまれ分類に熟中した世代にとっては、生き物の内部にある細胞に着目してメスを用い、プレパラート上のものを顕微鏡でつぶさに観察するという植物学の手手法との距離は極めて大きかったに違いない。

ベッシーは、彼の奨励する新たな科学教育が、唯物論的な功利主義の考えとは異なることを、次のように強調している。

ここ半世紀の教育界の歴史を振り返れば…学校教育において、偉大な諸科学の占める領域が以前よりいっそう拡大し、科学は人間の物質的利益の単なるサーバントになり下がってしまった感さえある。…このため、「新たな教育」という言葉が、かつて商業学校に対して持っていた意味と、ほとんど変わらぬものになってしまった。…科学の地位に関する、こうした功利主義的な見方に対し…強い批判が投げられ続けているというのに、これ³²に対し、それを気に留める者もほとんどいないという有様である。

機械論と唯物論の臭気を強く漂わせるベンサム流の快樂計算は、生態学に足を置くベッシーの植物学とは相性が良くない。科学としての研究を推進しながらも、彼は、それが物質中心のものとは一線を画すべく、功利主義とは異なる視点から科学教育の重要性を説いている。科学は、人間の物質的進歩への貢献において、単に低次元の意味での有用性を意味するだけのものであってはならないし、科学は、産業上の利益を促進するためだけの有用性を奨励するものでもない。植物学の研究が自由な

教養科目としての価値を失ってしまえば、実験工場の植物学者になるとか、チーズ工場やビール工場の細菌学者になるのではない限り、それが学生にとって無意味な知識に墮してしまう。ベッシーは、科学が自由な教養を涵養する科目であることをやめ、単に物質的な有用性のサーバントに成り下がることを大いに懸念した。

彼の示したこの懸念には、あくまで自由主義者として科学研究の重要性を解くスピリットがみなぎっている。パウンドは、植物学研究の専門的手法に加え、教育そのものにも熱心であったベッシーから、この自由主義の精神も受け継いだことであろう。

19世紀末になると、新たな専門の植物学が発展し始める一方で、大衆の博物学熱は、それがあまりに一般化し、面白みがなくなったことに伴い、あれほど高揚していた博物学熱もブームの常で急速にしぼんで行き、博物学書も全く色褪せてしまった³³。

19世紀末のアメリカにおいて、社会と教育の改革運動をも含む「形式主義への反乱」の背後には、機械論哲学と対峙する形で生氣論哲学の影響が見られる³⁴。若きロスコー・パウンドがベッシーから植物学研究を通じて学んだことは、後に彼が法学研究に転じてからも生かされ、これがプラグマティズム法学の提唱へとつながってゆく。

Ⅱ. 植物学者ロスコー・パウンド：ネブラスカ大学 PhD 第1号

英才教育

ロスコー・パウンドが、もっぱら法学者として知られている今日、彼の学生時代における植物学研究に目が向けられることは、ほとんどないように見える。下手をすれば、彼の植物研究は、法学研究に到るまでのエチュードか、幼い頃からの植物採集趣味が高じた余興のごときものとみなされかねない。パウンド研究に関する文献は膨大な量に上るものの、彼の植物学研究を取り上げたものはほとんどお目にかからないし、

彼の法律関連書なら数多くの書を所蔵している図書館でも、彼の「ネブラスカの植物地理学」を所蔵しているところは、国内ではほんの数館しかない³⁵。

ロスコーの父親スティーブン・ボスワース・パウンド (Stephen B. Pound) は、1833年、ニューヨーク生まれの法律家で、シェネクタデーのユニオン・カレッジを卒業後に法律の勉強をはじめ、1863年に法曹界に入る。ローラとの結婚後、ネブラスカ州に移り住み、生涯を法律実務家として活動的な人生を送り、晩年には裁判官も務めた経歴を持つ。スティーブンは、自宅に多くの蔵書を持ち、息子のロスコーが多方面の知的関心を示す上で、これが知的財源にもなったという³⁶。

母親は旧姓ローラ・ビドルカム (Laura Biddlecome)。1841年、ニューヨーク州フェルプス生まれで、小柄ながら活発な女性であったとされ、ニューイングランドの由緒ある家庭の生まれである。彼女は、1851年イリノイ州ゴールズパークに創設されたロンバード・カレッジに入り、そこで、ジョン・スタンディッシュという師と出会い、植物学への関心を持つに到ったという³⁷。

スティーブンとローラは、結婚後もしばらくニューヨークに住んでおり、ネブラスカに移り住んだのは1869年のことである。この年、後にロスコーが入学するネブラスカ州立大学が開校している。ロスコーが長男として州都のリンカーンで生まれたのは、1870年10月27日。ネブラスカ準州が連邦に加盟し、合衆国の一州となってまだ3年目のことであった。72年には妹のルイズ、74年には末子のオリビアが生まれている。

ネブラスカに移り住んだローラは、当地の初等教育に疑問を抱いたためか、3人の子どもをいずれも地元の小学校には通わせず、教育は自らが手掛けている。彼女はかなり教育熱心であつたらしく、ロスコーに対しては、3歳のときから教育を始め、6歳のときにはドイツ語も学ばせるほどの熱の入れようであった。彼が10歳になると、ドイツ人のメイ

ドが雇われ、それが彼のドイツ語教育にも役立てられた。ロスコーは、早くからドイツ人のメソヂスト教会にも通っており、ドイツ語を習得する上でこれも大いに役立ったという。パウンドの法律関係の論文や書物には、ドイツ語、フランス語はもとより、ギリシャ、ラテン語に加え、イタリア語、スペイン語に到るまで、殊のほか多数の外国語文献が表れるのも、幼少時からのこうした経験がその背後にあったろう。³⁸

こうした英才教育の成果もあってか、³⁹ロスコーは1884年、弱冠14歳でネブラスカ大学に入学している。ここで、彼は植物学を専攻し、同年にアイオワ大学から移籍してきた師のチャールズ・ベッシーから貴重な知的財産を得ることになった。学内のさまざまなクラブ活動にも積極的に参加し、植物学以外にも各種の人文学の知識も広め、4年後の1888年に17歳で同大学を卒業している。

だが、パウンドの植物学研究は、ここで終わったわけではない。卒業後ほどなく、父親のスティーブンは裁判官職を辞し、再度弁護士活動に勤しみながら、息子と法律書の輪読を行っている。学部生であった間も、ロスコーは、ホランドやトマス・クーリーなどの法律書に目を通してはいた。スティーブンは、ロスコーが植物学に熱中することを横目で見ながら、一方で息子の将来を案じ、それに不安と戸惑いを感じたためか、しきりに法律の勉強に転じるよう説得していたと見える。知人の法律家が、数人の若者の求めに応じて一室で開いた「法学校」にも通わせ、ブラックストーンの「コンメンタリー」なども読ませている。だが、当時はベッシーが手掛ける植物学の魅力の虜になっていたロスコーにとって、法律の勉強は甚だ無味乾燥なものにしか思えず、法律からはさしたる刺激を得られなかったばかりか、逆にそれが苦痛の種にさえなっていた。この段階で、彼はとても法律家になる決心ができず、父親のスティーブン⁴⁰を大いに落胆させたものらしい。

学部を卒業した翌89年、ロスコーは、ネブラスカ大学で植物学を研究テーマに修士号 M. A. を取得している。ベッシーがネブラスカ大学の

副学長に就任し、雑務に追われがちになったこともあって、ベッシーの研究計画の一部は、彼が目かけた卒業生と分担するようになった。これがロスコーには幸いし、彼は数々のプロジェクトに参加するチャンスを手に入れている⁴¹。

その後、今度は父親スティーブンの希望で、ロスコーは一年間の予定でハーバード・ロー・スクールに通うことになった⁴²。父親にすれば、早くから大きな才能を示しながら、なぜか植物学に熱中してしまった息子を、いかにして「まとも」な道に引き戻すかに腐心した結果であったろう。二年の在籍が学位取得の条件であるにも拘わらず、一年だけ通わせることにしたのは、ロスコーの優れた才能を見込んだからというより、双方の間にかかなりの葛藤があったことを窺わせる。LL. B. は在籍期間の関係で取得できなかったが、ロスコーは1890年、法曹資格試験に合格している⁴³。

ボストンのハーバード・ロー・スクール滞在中の一年間に、パウンドは、ジェイムズ・バー・エイムズやジョン・チップマン・グレイ、ジェイムズ・ブラッドリー・セイヤーなど、アメリカの著名法学者の講義を受講している。また、当時HLSの学長であり、ケース・メソッドという法学教育の生みの親であるクリストファー・コロンブス・ラングデルの講義にも出席している⁴⁴。ロスコーが、後に法学者に転じた理由は明らかではないが、彼を法学者に向かわせる切っ掛けになったのは、このハーバードにおける法学の習得であったであろう。

だがパウンドは、このまますんなり法学に転じたわけではなかった。彼の植物学研究は、一年間のボストン滞在中でも終わらず、法学の勉強を終えてネブラスカに戻ると、以前からの植物学研究仲間とのつながりが復活した。ネブラスカ大学は、ロスコーを最優秀卒業生90名の一人として迎え、彼は卒業生クラブの会長も努めている⁴⁵。こうした事情から、彼にとっては、植物学研究が再び最大のテーマになった。それは、彼の植物学への熱の入れようが、それほどまでに強かったことを物語ってい

ロスコー・パウンドのプラグマティズム法学—植物学研究から法学研究へ—
る。

パウンドはこの時期、一方で法実務の仕事をこなしながら、それと並行する形で以前からの植物研究を続け、1890年からはネブラスカ州の「ボタニカル・セミナー（NBS）」の研究者としてフィールド・ワークもやっている。この頃、ベッシーは植物学としてはアメリカで初めて大学に植物学のラボを設置し、パウンドがこのラボでベッシーのアシスタントを務めている。この間、パウンドは希少キノコ類の発見にも寄与し、それにパウンドの名を冠し *Roscopoundia* なる命名もなされた。1892年には、ベッシーの「ネブラスカの植物概観」に、パウンドがその共著者の一人として名を連ねている。こうした経緯を見れば、パウンドの植物学研究に対する熱の入れようは、ただならぬものであったことが窺われる。

そして1897年、パウンドはネブラスカ大学に博士論文を提出し、翌98年、27歳のときに植物学でPhDを取得している。この学位請求論文は、法律実務で多忙を極める中、同じ「ボタニカル・セミナー」の研究仲間であったフレデリック・クレメンツを説得し、学部卒業後には使用が許されなかった大学の植物標本室に、仕事が終わった夜間にこっそり潜り込み、2年に亙るたゆまぬ努力の成果として完成したものであったという。

このように、パウンドの植物学研究は、大学入学時から博士号を取得するまで、15年もの長きに及んでおり、彼が最も多感な若い時期を、ベッシーの指導の下、植物学研究とともに歩んでいたことを裏づけている。

こうした状況を視野に入れれば、パウンドが10代半ばからの学部時代に経験した植物学研究を、法学研究に到る前段階での余興のごときものと見ることは到底できない。それどころか、彼の熱の入れようから見て、むしろ後に植物学とは全く分野の違う法学研究に転じたことが不思議にさえ思えてくる。ベッシーの指導の下で、パウンドは、当時の最新の科学研究を習得した。したがって、後にパウンドが提唱したプラグマ

ティズム法学は、この植物学研究で得た科学研究の手法との間に、何らかの関連性があると見込むことも許されよう。

書評：オスカー・ドルーデ著『ドイツの植物地理学』

パウンドは、博士論文を提出する前年の1896年、ドイツのドレスデン大学教授で植物生態学の研究で知られたオスカー・ドルーデ（1852-1933）の『ドイツ植物地理学』の書評を「アメリカン・ナチュラリスト」誌に発表している。この書評の中で、パウンドは、自らがベッシーの下で手がけていた植物学研究がいかに斬新な分野であるか、それが旧来の博物学とはどのように違っているのかを手短かに述べている。

今日理解されている地理学的植物学は、比較的最近になって発展してきたものである。コレクターや目録作成者は、長年に亙り、ひたすら事実の収集に時を費やしてきた。地理学的植物学も、こうした事実収集を続けなければならないし、植物分布に関する事実をこれまで多少なりとも確認してきた。だが、これらの事実を系統的に突き合わせて分類し、それらに生物学的・生理学的諸事実を適用することは、ここ数年のうちになされるようになった新しい研究であり、現在進行中のものである。まず初めに、それがどの地域の産物かを列挙し、コレクターはこれに新しく珍しい種を加えようとする。次いで、科 families と類 genera の統計学的比較、とりわけそれを標高と移植媒体との関係で行うことになる。さらに、種の分布限界を、とりわけ植生を特徴づけ支配する限界との関係で見極める。こうした作業を通じ、地理学的植物学の基礎が出来上がった。

パウンドの植物学研究には、この時点ですでに10年近い年季が入っているが、彼自らがこの新たな植物学の展開を実際に体験してきた一人である。この書評は、彼がPhD請求論文をネブラスカ大学に提出する前年、それを同僚のクレメンツとまとめ上げているさ中に、それと並行して書かれたものである。したがって、この書評に述べられていること

は、植物学者パウンドが、当時実際に行いつつあったことの解説にもなっている。

それによれば、植物地理学なる新研究は、植物種を枚挙し分類することに留まるのではなく、生態学との結びつきにより、植物群の分布を動態的に把握する生物学でもある。その際に、植物種のすべてを枚挙するのではなく、その地域を支配する主たる種に注目し、なぜそれがそこで支配種になりえたのかを、生物学的、生態学的に探求する。その際、支配種を見極める上で有力な手法となるのが、統計学的手法である。

様々なやり方で研究されてきた、植物の種族分布に関する統計値 the statistics は、それだけで重要な結果を引き出せることを約束するものではない。こうした統計的研究が重要になるのは、生物学的グループが比較を目的に作られ、これらの植物グループに統計値が適用されて、初めて重要なものになる。ある地域に生育している諸種植物の自然なグループ種の数を調べてみても、それが最も一般的なやり方であるということ以外に、その地域の植生に関してはほとんど何も語ってはくれない。比較的数少ない種による一グループの代表は、その地を占める限りで支配的なものとみなしうる。一地域の植生を理解するには、その地域の物理学的、形態学的、地質学的特徴のみならず、いかなる種類の植物が、その地域の水、草地、平原、森林を支配しているのかも見極めねばならない。この後者の目的に向ければ、統計学は全く違った意味を持つ。そうした研究が、この新たな地理学的植物学の狙いである。…[この研究の方が][長々しい気象学的データのリストより、その地域の特性につき、より多くのことを語ってくれる。それはまた、当該種がいかにして現れたのか以上のことも語ってくれる。⁵²

リンネの博物学では、植物は群ではなく単体としてサンプルにされ、しかもその具体的生育地とは切り離して扱われる。したがって、それがどこで採取されようとも、サンプルはもっぱらその個体を持つ形態の類似や相違により分類され、それがなぜある地域にのみ生育するのかなどの点については、考察の対象には入ってこない。

これに対し、新たな植物地理学では、育成する植物を、森林、草原、草木などの土壌との関係で捉え、ある地域の主要な植物群がなぜそうした分布になっているのかを問い、その原因を生物学的に見極めようとする。その際に観察対象となるものは、そこに育成している個々の草木ではなく、その地を支配する植物群としてコミュニティを形成するものである。⁵³

この分野の科学に対してなされた、ひとつの顕著な貢献が、ドルーデ博士の新著「ドイツ植物地理学」である。第一部は、この1月に出たばかりである。そのサブタイトルから、本書の狙いをつかむ糸口が得られる。そこには「ドイツにおける植物の地理学的特徴図 Charakterbild」とある。近年、限定的な地域でも広域でも、その植物種の特徴について、多くの研究がなされてきた。だが、ドルーデ博士は、ドイツのような広大な国の植物について申し分ないマップを示し、植物地理学の研究において一時代を画した。本書を一瞥すれば、読者はそれだけで、植物地理学のシステムが見事に達成され、今後、研究者たちは…この手法を他の地域に適用するだけで済むことが分かる。⁵⁴

パウンドは、ドルーデのこの成果を手本とし、自らの植物学研究でネブラスカ州の植物分布マップを作り上げることを目指していた。この書評を書いた翌年に提出された彼の博士論文の序文には、師のベッシーへの謝辞とともに、オスカー・ドルーデの研究への賛辞も記されている。⁵⁵ 書評は次のように締め括られている。

本書は…地理学的植物学のサマリーである。…われわれは、ドルーデ博士の書により、ドイツから非常に隔たった地域で、この種の植物学研究に非常に大きなはずみがつくと容易に予見できる。それは、本書がその強みを生かす実際の概略を示してくれたからである。わがアメリカでは、この研究に極めて多くの機会が与えられ、それを生かして、様々な生物学的、植物学的探査がなされつつある。ある大きな国でなされたこのような大規

模な地理学的—生物学的研究例が、大きなインスピレーションを与えてくれる。ドルーデ博士の書物は、非常に興味をそそる書物であり、今ようやく成長し始めた重要な分野における最近の結果の概要⁵⁶としても、またその直接の目的においても、最も価値あるものになっている。

この時点で、パウンドはまだ法学者ではない。だが、ここに示された植物研究のやり方は、後に彼が提唱する社会学的法学研究において採られる視点との間に、多くの点で類似性⁵⁷が見られる。

パウンドの植物研究は、環境から切り離された草木を一本づつ丁寧に観察し、それがどこに分類されるかを見極めるようなやり方とは対照的に、群生する植物に注目し、その土壌や気候、高度などの条件との関係を見極めながら、その地を支配する植物群の分布を調べることにあった。その後、法学研究に転じてから、パウンドは、自然権の絶対的な擁護を試みる自然法論や、法とは主権者の命令であるといった分析法学に示される、極度に個人主義的で演繹主義的なやり方の不毛さに対する批判を展開している。この点で植物学研究における視点との共通性が見られるのは、法学においても、社会の中にいる人間を単体の個人として捉えるのではなく、あくまで人間をグループや集合体として把握し、それらが時代の変化する中で相互に影響を及ぼし合うことに、社会学的な視点から注目するためである。自然の中の植物が群れをなして生育し、環境との相互関係で支配種が定まるように、人間も社会というフィールドの中で、時代の変化や周囲との関係で、相互にさまざまな影響を及ぼしながら生きている。したがって、社会の中の人間も、各個人を単体として捉えるのではなく、それを群や集団として捉え、法をその中で実際に作用を及ぼす一つの要素として捉えようとする。パウンドの眼には、法はあくまで社会というフィールドの中で、個人ではなく人間集団を見る社会学の視点で捉えられるべきものであって、自然法論や分析法学に見られるような、強度の個人主義による抽象的個人の想定に基づく法の見

方が、具体性を欠いたアプリオリなもので、甚だ不毛な結果に到るものと映じている。⁵⁸

PhD 論文「ネブラスカの植物地理学」

学部時代から植物学研究に没頭していたパウンドが、15年に及ぶ研究成果として提出したものが、博士論文の「ネブラスカの植物地理学」である。⁵⁹これは、法律家としての実務や法学研究の仕事も重なり、多忙を極める中で、「ネブラスカ・ボタニカル・セミナー (NBS)」のメンバーであったフレデリック・クレメンツを説得して書き上げ発表されたもので、トータル330ページにも及ぶ、堂々たる研究書である。

研究内容に目を向ければ、これは当時まだ支配的であったリンネ流の植物分類学とは全く異なり、ダーウィン以後の進化思想の進展を基礎に据え、生物学的視点からいかなる植物群がいかなる理由でネブラスカの各地に分布・生育するに到ったかを、生態学的な側面を含めて研究したもので、師ベッシーの植物学研究の姿勢を受け継いだ形に仕上がっている。これは「英語で書かれたこの種の研究としては初の書物の厚さにまで仕上がったもので」、ダーウィンの影響を受けて発展しつつあった、「生態学 ecology 分野の包括的研究書であり、アメリカにおける植物学研究の画期的労作」と評されるほどの出来栄であった。⁶⁰パウンドは、これをネブラスカ大学に PhD の学位請求論文として提出し、学位は、ネブラスカ大学認定の第一号博士という名誉も伴って、1897年5月12日に授与されている。⁶¹

この「ネブラスカの植物地理学」について、当時の植物学者エリザベス・ブリットン⁶²は、次のような評を著している。

本書の序を見れば、これは、ネブラスカ州植物研究所に所属する「ボタニカル・セミナー」のメンバーたちが、同州に生育する植物群を5年近くの歳月をかけ熱心に研究した成果であることが分かる。ネブラスカの植物

に関する組織的な研究は、1884年にベッシー博士によって始まったもので、その後、博士と彼の研究者たちは、その研究を精力的に続けてきた。

…

この植物学研究所 NBS が創られたのは 1892 年であり、そこでの作業は、一連の報告書を作成するために標本収集と観察とに向けられてきた。報告書は、同州に生育する植物群を植物地理学の観点から扱い、ネブラスカの一連の植物群の研究論文に仕上がっている。手始めに出版されたのが、同州の植物群研究の三部作であり、本書はその第一集第一部に該当する。著者 [パウンドとクレメンツ] は、同州の植物地理学を完成させるためには、多方向に及び長年に亘ってなされるべき調査・研究が山積していることを十分理解している。…本書は、ネブラスカの植物地理学に関する一般的事実を適切なやりかたで提示し、重要な多くのテーマを詳細に扱う上で、十分なものに仕上がっている。

本書にインスピレーションを与えた源泉は、ドイツの植物地理学者の著作、とりわけオスカー・ドルーデ博士の『ドイツの植物地理学』であった。だが、このテーマが植物学の知識に関して独立部門になったのはつい最近のことである。ミネソタ大学のマクミラン教授が行った諸々の観察を除外すれば、州がこの手法で行った植物調査としては、これがアメリカ合衆国初の試みである。したがって、本書には、通り一遍以上の注意を向けるべき特別な価値が認められる。

書評からも、植物地理学という研究がベッシーの指導の下で始められた最新の植物学研究であり、本研究書がネブラスカ州「ボタニカル・セミナー」のメンバーによる努力の結晶であって、アメリカにおけるこの種の初の研究書であることが裏づけられている。ブリットンの書評が物語るように、パウンドが本格的な法学研究に転じる前に行っていた植物学研究は、単なる趣味の延長どころか、ベッシーの下で彼が渾身の力を込めて行っていた専門的研究であり、その成果は、アメリカ初の業績といわれるほどのものにまで仕上がっていた。したがって、今ではアメリカの著名な法学者として知られるロスコー・パウンドが、植物学者として名を馳せるチャンスは十分にあったろうし、そうなっていても何ら不

思議なことはなかったはずである。

ブリットン⁶⁴は、書評を次のように結んでいる。

このように、本書が示すことは、近年において生物学研究がいかに進歩したかということ、しかもそれは、単なる植物分類リストと目録を提示することとは、かなりの距離を隔てたものだという事である。同時に、それは、十分に組織的にして形態学的な研究がいかに重要であるかを強調し、こうした作業の信頼性を高めるために、広範囲に及ぶ正しい訓練が不可欠なことを裏づけている。これらの作業が、きわめて有能な形でなされたことは、著者たちの信頼性の高さを反映するだけでなく、そのガイドに従いこの作業を達成した研究組織の力量の高さも示している。

ブリットン⁶⁴は、パウンドの植物地理学を生物学研究の中に位置づけており、それが旧来の博物学研究の延長線上にあるものではないことを裏づけている。だが、植物学研究の門外漢にはこの違いが不明であるため、植物学研究を安直に当時における大衆の博物学熱と同類のものとして捉えがちになる。このため、法学者のロスコー・パウンドが、若い時代に植物学研究を行っていたと耳にすれば、往々にして、彼の心には分類学への執着が宿り、その結果、法理論家として、度の過ぎた分類癖・分析癖が見られるといった類の分析がなされがちになる。

法学研究者は、しばしば、パウンドが若き日に植物学の研究を行っていたことで、彼の心に分類学への転機がもたらされた結果、法理論家として、彼には度の過ぎた分類癖・分析癖があり、人為的カテゴリーに執着する癖もあると言われる。彼の法学研究に、しばしば過剰なカテゴリー化が見られることは確かであるが、これは法思想の複雑さと、個々の思想家が異なった社会状況と価値判断を結び付け、それぞれのシステムを形成してきたことを示そうとする彼の試みであって、植物学の研究を通じ、パウンドが法学のリンネになったわけではなかった。⁶⁵

大衆の博物学熱とは別に、ダーウィンの進化思想が浸透する前には、専門家による植物学研究においても、リンネの分類学が支配的であった。このためか、植物学には未だに分類という印象がつきまといがちである。しかも、対象を分類するという作業は、暗黙のうちに、既存のカテゴリーに対象を嵌め込むことと思われやすい。分類にまつわるこのような印象は、進化論が支配的になる以前には、必ずしも見当違いのものではなかった。

そもそも、進化という観念には、巻物を展開するという意味があり、それは一定の秩序だった変化という意味がある。⁶⁶ダーウィンは、地球上に多種多様な種の生物が生息している理由を説明するに当たり、当時の神学で前提されていたように、天地創造の際に神が全種を創造したとするアイデアを採らなかった。彼は、最初の一つのものがあった生命の元が、長い年月を経る中で現今のような多種多様なものにまで拡散したと考え、種の多様化が起きる原因として、いわゆる適者生存という観念を持ち出した。それは、生物が自らを取り巻く環境の変化に適応し切れず、大半が絶滅してしまう中で、わずかな個体がそれに適応して生き残り、長期に亘って子孫を残し続けた結果、それが終には別の種へと変化し、生物の多様化が起きたというのである。進化論の影響を受けた植物学が、系を辿る形での分類を強調するのは、このためである。

しかも、リンネとダーウィンの考え方の決定的な違いは、リンネが神による特殊創造説と種の不変を堅く信じていたのに対し、ダーウィンは、種が変化することを前提にしていた点にある。⁶⁷今では、種の可変性について疑う者はほとんどいないように見えるが、19世紀半ばにおいては、事情は全く違っていた。ダーウィン進化論が教会の逆鱗に触れたとすれば、まさにこの点においてであったろう。種が変化するか否かが、当時の重大問題であり、種の変化を認めることは、正統派信仰からすれば容認し難いことであった。

こうした違いを前提にすれば、分類という作業が、何かを基準とする

対象の序列化を意味する点では、リンネの分類もダーウィンのそれと同じである。だが、リンネに進化という観念はなかったので、系による分類という観念も存在しようがない。種は変化しないとするリンネの静的な分類と、種はダイナミックに変化するというダーウィン以後の動的な分類とでは、分類の基準が全く違ってくる。

パウンドの「ネブラスカの植物地理学」を一瞥すれば、彼が単なる分類壁の持ち主であるという印象は一変する。それは、雄しべと雌しべの数に従い、数多くの植物を見事に分類し切ろうとしたリンネの静的な植物学を克服しようと、19世紀の進化論を基礎に据えた新たな植物学研究の構想がそこに明らかになっているからである。パウンドは、序において次のように述べている。

植物地理学の生物学に対する関係——植物地理学 *phytogeography* が、植物学的知識の中で独立の領域になったのは、ほんの数年前のことである。この分野の科学は、わずか数人のヨーロッパ大陸の植物学者の努力から発展した。これまでの多くの植物学者が、主に地理学的・分類学的データを示すことにより、この結果に貢献してきたことは事実である。だが、彼らの仕事は、必ずしも不可欠な性質のものではなく、彼らが示した事実も、甚だ雑多にして未消化のものでしかなかった。当時の地理学的植物学 *geographical botany* が関心を向けていたものは、もっぱら種の目録作成 *the cataloging of species* であり、種の分布調査であって、植物とその生育地との間に不可欠な関係があることが十分理解されるようになったのは、ごく最近になってからである。この関係がより十分に理解された結果、植物地理学という科学が、今のような形で確立されることになった。

したがって、植物の分布と生育に留まらず、植物の生物学的機能に関するより深い問題も植物地理学に含まねばならない。植物地理学は、植物の生物学的機能に関する諸問題が、その分布・生育といかなる関係にあるかを研究するものである。この面の研究に力を入れることで、科学の一部門として植物地理学は重要な地位を占めるものとなり、将来その発展が約束されるようになる。…植物地理学が生理学に対して持つ関係は、形態学 *morphology* が組織学 *histology* に対して持つものと同じである。両者が

結び付けば、植物生物学 *phytobiology* の全域が示される。

より直接的な面において、植物地理学は一地域に生育する植物を枚挙することにより、それを通じて…地理学と生物学との関係を明らかにする。だが究極的にそれが関心を示すものは、植物の生育とその有機的要素との相互関係にある。植物地理学は、植物の生育場所とこれら有機的要素の役割を見極め、植物生物学の研究活動を支える究極原因を発見しようとするものである。そこで扱われることは、抽象的に言えば、一地域における植物の生育を通じて示される、諸々の原因と力 *causes and forces* の関係を⁶⁸ 解明することである。

27歳のパウンドにとって、これはかなり野心的な内容であったろうし、19世紀末の植物学研究において起きつつあった一大転換の流れを受け継ぐものである。それはリンネの植物学のように、植物が既存の分類枠のどこに嵌め込むかの模索ではなく、ネブラスカに生育する植物を、植物の生理的・生物学的機能から解明し、その理由を説明しようとするもので、ひいては生物学を地理学と結び付けようとする野心的な見通しも垣間見える。これは、リンネ風の詳細な分類癖を連想させる植物学どころか、未だ知られざる原因を想定した上で、観察された現象をその結果として説明しようとする、新たな科学的植物学研究的の遂行を表明したものである。これにより、植物の分布とその生命活動を支える有機的要素との間に、何らかのつながりがあることを見出し、偶然としか見えなかった植物分布の仕方に、一定の規則性があることを解明しようとする遠大な構想も示している。

これまで植物学者によって集められてきた地理学的・分類学的データは、かなり膨大なものであったろうが、その価値は認めながらも、パウンドがそのままでは必要不可欠なものとは言えず、「雑多にして未消化なものでしかなかった」と言うのは、これらを植物地理学の枠組みに乗せ換え、膨大なデータの大幅な読み変えが必要であることを示唆したものである。

Ⅲ. 植物学者から法学者へ

「機械論的法学」に見る植物学研究とのつながり

植物学研究を通じパウンドが若い時代に身に着けたことは、単なる植物研究の技法ではなく、ダーウィンの影響を受けて展開され始めた、当時における最新の科学研究であった。したがって、そこで彼が得たものは、植物学研究の枠内だけに留まるものではなく、法学研究に転じてからも、基本的な視点は維持されて不思議はないものである。この最新の科学研究に専念してきたパウンドが法学研究へと転じた際に、自然法論、分析法学、歴史法学が陣取っていた英米の法学研究は、彼の眼にどのように映じたのであろうか。それが決して肯定的なものでなかったことは、パウンドが提唱したプラグマティズム法学が、これらのいずれとも違う斬新な視点を示していることから推測できる。

パウンドの著した「ネブラスカの植物地理学」には、「植物地理学は、植物の生物学的機能に関する諸問題が、その分布・生育といかなる関係にあるかを研究するものである」という下りが見られる。これを法学研究の目で多少読み替えてみれば、これが後に彼の唱えた法学の基本構想につながっていることが読み取れる。

リンネの植物学がそうであったように、博物学に根差す植物学の伝統では、植物が生育した地の土壌や気候とは無関係に、植物を単体のサンプルとして取り出し、それを既存の分類枠との関係で考察するのが常であった。これと同じように、法学研究においても、自然法論や分析法学は、そのアイデアの発生地や文化圏などとは無関係に、もっぱら法概念分析に意識を集中させ、いつでもどこにでもそれが無条件に適用されるものと想定している。そこでは、古典力学をモデルとする機械論を基礎に、演繹法を用い閉じた論理の体系を追及するスタイルが採られる。

だが、ダーウィンの影響を受けた新たな植物学研究は、生育する植物

ロスコー・パウンドのプラグマティズム法学—植物学研究から法学研究へ—

やその分布と、その周囲を取り巻く環境条件との関係を視野に入れ、リンネ風の植物学研究を一変させた。その研究を自ら熱心に行ってきたパウンドが、後に法学研究に転じた際に、法学研究の分野でも「リンネ風」の研究が展開されているのを目にすれば、すでに彼が植物地理学の研究で身に着けた視点を、ここにも応用できると感じたろう。

そこで、彼は、生態学の視点から、演繹法による閉じた体系ではなく、オープン・エンドを前提に、それまでとは違う新たな視点を法学の世界に導入した。その上で、ヒューマン・ネイチャーの抽象的な定義から演繹する旧来の手法を排斥し、人間と社会の関係についても、植物とその土壌の関係を究明するのと同じように、社会を人間の集団として捉え、その生育する地の文化など環境との関係を視野に入れる。さらに、概念からの演繹に頼ってもたらされる普遍的な法、書物に書かれただけの法 *law in books* とは異なる、実効性ある法 *law in action* を、フィールドワークの地道な観察を通じ見極めようとする。これは、法社会学の第一人者として知られるオイゲン・エールリッヒが言う「生ける法」にも通じる。だが、パウンドにこれらの視点をもたらしたのは、彼の植物地理学研究であって、法学研究ではないだろう。

パウンドの法に対する考え方は、契約の自由や財産権を絶対のものとして頑なに擁護するものでもなければ、法を主権者の命令とする考えに固執するものでもない。歴史法学に対しても、法と社会の変化を関連づけて捉えた点はプラスとして評価しても、原初の概念や制度の中にその後の発展の一切を見ようとする姿勢に対しては、露骨にそれを批判し拒否している。これらの法学研究を、原理からの演繹に固執するアプリオリズムとして拒否し、法にプラグマティズムを導入すべきであるというパウンドの見方は、今日ではなじみ深いものになっているが、彼が法学研究に転じた 20 世紀初めの英米の法学には、こうした見方は甚だ希薄であった。

パウンドが法学者に転じ、「機械論的法学 *Mechanical Jurisprudence*」

と題した研究論文を Columbia Law Review に発表したのは 1908 年、植物学研究で PhD を取得してから 11 年後の 38 歳のときである。これは、パウンドの主だった法学論文の中では初期に属するもので、ここで彼は、古典力学をモデルとして法学を機械論的な視点から扱うことへの批判を展開している。そこには、ベッシーの指導の下で長年に亙り研鑽を積み、植物学研究で培った科学者としての視点が明確に表れている。

パウンドは、論文の冒頭において、現代社会では、十分に平等で厳密な司法が求められるため、今日の法学は、その要請に応えるべく、科学的で人為的特徴 scientific and artificial character を逃れることはできないというポロックの言葉を引用し、この文脈において、「科学的」という言葉をどのように理解すべきかを問いかけている。

パウンドはポロックの言葉を手掛かり、そこで三つのポイントを挙げる。それは、紛争解決に向けた「十分な司法の実現」、同様の条件下では同様な法の適用を求める意味で「平等な司法の実現」、相応の限界はあるにせよ行動するに際して予測可能な「厳格な司法の実現」の三つである。これらをまとめ、パウンドは法学が科学である証を「理性への合致、一貫性、確実性」とし、科学的な法学とは、司法運営のための道理に適った一連の諸原理 a reasoned body of principles からなるもので、その対極に位置するものが、「役人の気紛れにより運用される法システム」であると述べている。役人の気紛れは、たとえいかに正直なものであろうと、それを自然法と呼んでみようと、科学の対極に位置づけられている。こう述べた上で、パウンドは、自然科学とは異なる実用目的の学として、法学の科学性の特徴を次のように述べている。

科学としての法が持つ特徴は…それが司法の運営に対する「手段」であるという点にある。法がその目的を十分に、等しく、厳格に果たすためには、法学にはこうした特徴を持つことが必要である。したがって、それがこの役目を十分に、等しく、厳格に果たせない以上、法は、その存在目的

において失敗し続ける。法学が科学であるのは、それが司法運営における個人的な気紛れ the personal equation になりかねない要素を排除するため、腐敗を除去し、役人の無知が引き起こす危険性を制約するためであって、法学は、決して科学のための科学であるわけではない。科学は、目的に対する手段であり、法の是非に関する判断は、それが成し遂げた結果によってなされるべきであり、法理の精緻さによってなされてはならない。法に価値ありとされるのは、それがどれほど目的に適ったかによってであり、一連の法理の美しさや、法がその基礎⁶⁹に据えたドグマからルールを引き出す厳密さによるのであってはならない。

物理学においては、自然の中に法則があると仮定し、仮説を通じ観察対象の中にその法則を見出そうとする。これに対し、法学は、自然法則の解明を狙うものではない点で、物理学とは異なる。しかも法の諸々の作用は、過去や現在の事実⁷⁰に左右されるだけでなく、法の制定者や運用者の意思によっても左右される。また、これらの法が定められ運用されるのは、法それ自体のためではなく、社会的な目的を達成するためである。したがって、法学研究は、法がどのように制定され運用されるかを示すだけでは不十分で、法をどのように用いれば、目的を最もよく達成できるかも視野に入れねばならない。法学に求められる科学性は、法を適用する際の指針を与えるため、誰に対しても等しく法が確実に適用される基準を提供することにある。

「機械論的法学」という言葉はパウンドが生み出したものであるが、これはまさに、法学を厳密な科学のための科学たらしめようとして失敗した例として描かれている⁷¹。それは、物理学が成功したことにあやかり、幾何学をモデルとしたため、結果の妥当性よりも演繹推論の正しさの方を重視してきた。法理の精緻さが殊のほか重視されるのは、このためである。しかし、法学は、紛争を解決するための実用性がその中心を占めている。したがって、法学に潜む危険性は、法学があまりにも厳密な法理の演繹体系⁷²を目指そうとするあまり、法理の体系化が自己目的と化し

てしまうことにある。幾何学をモデルとする法学は、ひたすら法理の整合性を維持することにばかりのめり込み、社会の中に生きる人間を扱う視点を欠いている、とパウンドは見る。

ダーウィンの進化論が進展してゆく中で、近代植物学に向けた科学の転換を、パウンドは自ら体験する機会を得ていた。このチャンスを通じ彼が身に着けたことは、科学とは何かを見据えることであつたろう。ダーウィンの進化論の出現に伴い、ニュートン物理学をモデルとしてきた科学研究とは方向を違え、生態学をモデルとする科学研究が現れ始める中で、彼は、自ら植物学を通じその革命的变化を体験していた。この経験を経て、パウンドは法学研究に転じ、彼が植物学研究を通じて培った視点を通じて斬新な法のプラグマティズムを提示することになる。

彼は、自然法論をはるか以前から不毛であつたとは言っていない。絶対王政の時代に、政治や国家からの自由を目指し、個人主義を基礎に基本権の重要性を説こうとしたことの意義は認める。だが、それがかつては有意義であつたとしても、時代の変化を視野に入れず、その後も盲目的にそれを維持しようとするれば、かつては有意義であつた制度もいつかは輝きが失われ、単なる惰性の産物と化してしまうという。

あらゆる体系は、体系化されたテーマに関して石化しがちである。ある世代の観念を、次の世代へと押し付けがちになるのは、このためである。いかなる科学にとっても、その進歩を阻害するものの一つは、すでに世を去った偉人のゴーストが支配することにある。彼らが考えた方法の健全さは忘れ去られてしまい、不健全な結論ばかりが崇められがちになる。法の科学も、この傾向を免れるものではない。法システムは、科学が退化し技巧に墮してしまう時期がある。そうなると、科学としての法学が、機械論的な法学と化してしまう。⁷³

師のベッシーも、植物学の進展を阻む守旧派の旧態依然たる態度について、それを過去の慣わしへの恭順さがもたらす悪夢として批判してい

ロスコー・パウンドのプラグマティズム法学—植物学研究から法学研究へ—

た。パウンドのこの下りにも、ベッシーの言い回しが生き写しの形で繰り返されている。⁷⁴

革新主義者のパウンドにとって、時代はもはや、かつてのように政府からの自由だけを叫んでいれば事足りる状況ではなくなっていた。それにも拘らず、健全な常識を生かすべき場面に到りながら、小器用な法理の細工を誇るうちに、常識はそっち退けに、ひたすら結論より体系化を重んじるような本末転倒が、法学において演じられていた。その背後には、技術の精緻さへの偏愛に加え、解釈における三段論法をことさら強調する形で演繹法を受け容れる、機械論をモデルとした法学の姿が控えていた。ロックナー事件に対する最高裁判決は、彼がこの論文を発表する直前に下されたものであるが、彼には、そこに示された契約自由の原則を「実体的デュープロセス論」として擁護する法学のありようを、この典型として捉えたに違いない。革新主義者の一人として、目的と手段をとり違え、すでに石化してしまった法学として批判する姿勢は、彼が「ネブラスカの植物地理学」において、旧来のリンネ流植物学を批判した際の視線の延長線上にある。

彼は、自らが提唱するプラグマティズム法学の構想を、次のように述べている。

われわれは、アプリアリな概念からの厳格な演繹の枠組みを示すというだけの理由で、それを科学的なものだとはもはや考えない。今日の哲学では、理論とは「われわれがそれに足を置くための道具であり、謎に対する答えではない。」(ジェイムズ：プラグマティズム)したがって、演繹体系としての科学という観念は、すでに時代遅れのものとなり、他の諸科学で起きた革命が、この点で法学においても起きねばならないし、現に起きつつある。

科学におけるこの革命が起きたのは、概ね、19世紀半ばであった。19世紀前半、学問のあらゆる部門の科学の方法を支配していたのは、ドイツの古典哲学であった。支配的な概念からの弁証法と演繹により、人々は知

識の全内容を解釈した。自然科学の分野においてでさえ、こうした信念がはびこり、自然と自然現象に関する諸理論を、長きに亙り規定してきた。例えば、リンネは、「命あるものは卵からしか生まれぬ omne vivum ex ovo」という命題を置き、この基本概念から、動物と植物の器官の間の相同理論 a theory of homologies を演繹しようとした。だが彼は、こうした結論に達するのに、あるいはこの結論を維持するのに不可欠な、生物や器官そのものについては、何も研究しなかったと見える。

だが、今日、生物そのものの研究により、彼のこの基本命題は捨てられた。自然現象の説明として、目的因 final causes を効果 efficient に置き換えたことは、政治思想における革命に匹敵するものであった。われわれは、諸制度の基礎を、人間の本性に関し想定された諸原理からの演繹に求めようとはしない。われわれがそれに求めるものは、実際の効果を示すことであり、その基礎に据えられるものは政策的なものであり、人々の需要に確かに適合することである。…

今やわれわれは、哲学において、また自然科学と政治において達成されたものと同じことを、法学において達成する必要がある。現代人は…法学におけるプラグマティズム、社会学的法学 a sociological jurisprudence を達成しなければならない。⁷⁵

パウンドには、植物学研究において、博物学から近代植物学への変革をつぶさに見てきた経験があった。したがって、彼は法学だけを見据え、やみくもに変革を唱えていたわけではないだろう。科学研究を通し直接にこの変化を体験してきた彼が、方向を転じ法学研究の世界に足を踏み入れたとき、そこで目にしたのは、旧態依然たる機械論と演繹主義礼賛の世界であった。その変革が政治における革命に匹敵するほどの難事であるにせよ、これはこの半世紀を通じ諸学の中で起きてきたことであり、法学においても実現されて然るべきものだとは彼は考えた。この変革を経て装いも新たに現れる法学こそ、プラグマティズム法学であり、社会学的法学なのである。

リンネが生物の研究に不可欠な生物や器官そのものの研究をしなかつ

た点を、パウンドはここで明確に批判している⁷⁶。これは、素人芸の域内で押花作りに興じていた者が言ったことではない。法学のありようを論じる中で、まさにリンネの博物学研究に示された大きな欠点を、植物研究専門家の眼で鋭く批判した一言である。

パウンドがこれを法学論文の中で言い放ったことは、もっぱら法理の演繹体系に意識を集中させる既存法学の研究姿勢が、彼の眼にはリンネの博物学研究と同列のものに映じたからに他なるまい。これに対する批判の先にあり、パウンドの目指していたものが、法の生態学的研究であり、生ける法の探究であった。このように、彼が既存の法学を鋭く批判した背後に、彼が『植物地理学』を通じて追求し、その成果を目の当たりにしてきた経験を強く感じさせる。

法の生態学

パウンドのアプリオリズム批判は、当時の法学だけに向けられていたわけではない。19世紀末の経済学において、レッセ・フェールの思想として古典主義経済学の支えるものでもあり、ロックナー事件において最高裁が依拠してもいた経済理論も、アプリオリズムに支えられた機械論の権化というべきものであったからである⁷⁷。

南北戦争当時のアメリカの古典主義経済学研究にも、神学的動機が明確に表れている。例えば、当時の代表的な経済学者アーサー・ラサム・ペリーは、「商品交換の諸法則がその基礎としているものは、神の意思という確たるものに他ならない」と述べている⁷⁸。ペリーによれば、これらの諸法則から引き出される最も基本的な権利が財産権であり、財産にはそれに相応しいやり方で活用する権利が伴わなければ、その価値は限られてしまう。この財産を活用する権利が自由に商品交換する権利であり、これは、自らの欲求を満たすため、万人にとって自然にして自明かつ不可侵の権利である⁷⁹。しかも、各人が商品交換する唯一の動機が双方にとっての利益であるとするなら、交換するごとに売手も買手もより豊

かになる。かくして、市場を支配する見えざる手の法則に従い、経済は公平かつ滑らかに機能する。⁸⁰ そのためには、政府の持つ権限を限定し、市場のこの機能を妨げないことが肝要である。⁸¹ 政府の役割を小さく限定し、自由に商品交換ができる状況を達成する闘争は、表現の自由や思想の自由にも匹敵する、歴史上の一大闘争である。⁸² さらにここから、誰もが己の能力を磨き懸命に努力を重ねれば、必ず成功のチャンスが手に入るのであって、社会で失敗した者は、その努力を怠った落後者であるという道徳論が引き出される。

これは「人間の本性に関して想定した諸原理からの演繹に求めようと」するもので、科学とは言えないものとして、パウンドが批判した典型例である。これを法学に持ち込んで科学と称し、最高裁がアメリカ合衆国憲法上の一大法理にしたため、後に革新主義の批判がそこに集中することになった。もちろん、パウンドは社会主義者でもなければ、後日のニューディーラーでもなかった。革新主義者であった彼は、あくまで、古典主義経済学を批判しながらも、市場経済を重視していた。だが、それらを支えるものがレッセ・フェールの道徳論に見られるような硬直した思想であれば、新たに出現した産業社会の中で、個人の努力ではどうにもならない問題に対し、相応しい解決策を模索することも期待できない。

学問の世界における大きな変革と、産業社会という新たに出現した状況の中で生じる新たな問題を前に、新たな打開策が求められ、革新主義はそれに応じる新たな視点を生み出す必要性に迫られていた。

若き時代にパウンドが行った植物地理学は、単なる植物のサンプル採集とその分類に尽きるものではない。それは、生育する植物とその土壌との間の関係を、生態学的に究明することを通じ、ネブラスカの植物分布を調べようとするものであった。⁸³ この植物学研究の新たな視点を彼は法学研究にもつなげ、法学にプラグマティズムを導入し、社会学的法学の提唱を行ったのである。

一方における、全能の国家という抽象的で非現実的な理論、他方における、原子論的で作為的な個人の自律という見解、この双方を排し、協同という無数の絆と自然な社会的権威を持つ世界の諸事実を見据えることこそ、社会学的法学者の任務である。…法学においては、この社会学的な動きは、プラグマティズムを法の哲学とする動きである。言い換えれば、これは原理や法理の適合を考えるのに、第一原理を想定することをやめ、人間の諸条件を正面から見据えることである。つまり、法において人間的諸要素を中心に置き、論理をそのための手段として本来占めるべき地位に据え直すことである。アプリアリに想定された諸概念からの演繹法を逃れようとする諸科学の動きの中でも、法学は、その最後尾に位置している。

エールリッヒも、法学を「最も遅れた学問」と称したように、⁸⁵それまで支配的であった神学や哲学の中から、諸科学がそれぞれ経験科学として自律し始めた19世紀後半にあって、法学は頑なに「概念法学」という閉じた演繹の世界にこもり続けようとしていた。アメリカにおいては、ブラックストーンやベンサムに代表される、自然法論、分析法学が占めるアプリアリズムの中で、パウンドはその改革を目指した一人である。

プラグマティズム法学：形式主義への反乱

プラグマティズムと言えば、ハーバードにおけるウィリアム・ジェイムズの講義がすぐ脳裏に浮かぶ。したがって、パウンドがこの論文の前年に出版されたジェイムズの講義録を引用したことを見れば、パウンドが言うプラグマティズム法学もジェイムズの影響を直接に受けたものと思いがちである。

だが、もともとプラグマティズムの思想は、1870年代にボストンの一角でライト、パース、ジェイムズ、ホームズらが細々として行っていた会合にその端を発するもので、それが有名になるのは、ジェイムズの講義録が出版されてかなりの時を経てからのことである。したがって、パウ

ンドがジェイムズの著作を引き、プラグマティズムという言葉は使ったにせよ、彼がプラグマティズムに類する発想そのものを持つに到ったのは、19世紀末に向けて広がった「形式主義への反乱」の中に含まれる、⁸⁶新たな植物学研究を通じてであったように思われる。この知的動向を、彼はまず植物学研究において身に着け、後にそれを変革の「最後尾」に位置する法学に持ち込むことを試みた。

このように、パウンドの法のプラグマティズム、あるいは社会学的法学の構想には、彼が若き時代に本格研究した植物地理学との密接な関係が窺われる。「機械論的法学」においては、リンネの博物学批判と同じ調子で、連邦最高裁への批判が以下のように示されている。

合衆国憲法第十四修正を適用した例が、今日における概念法学 a jurisprudence of conceptions の典型的な例を提供してくれる。それは、まずスペンサーの社会静態学 Social Statics をアメリカ合衆国の基本的な法に編入しようと意図し、そこから諸々のルールを演繹したものであり、これが社会の進歩を妨げている。とりわけ、契約の自由という概念を基礎にしてルールや判決が引きだされたが、その現実の結果を検証してみれば、これが自由を打ち毀していることが分かる。…この契約自由の概念が、論理的演繹の基礎に据えられている。裁判所は、こうした演繹がいかなる結果をもたらすか、いかなる実際の状況下で適用されたかを調べようともしない。裁判所は、結果的に、この原則がもともと考えられたものとは正⁸⁷反対の状況を生んでいることを、見ようともしていない。

ロックナー事件判決の反対意見の中で、オリバー・ウェンデル・ホームズ裁判官が述べた有名な下りを借用しながら、パウンドは、いわゆる概念法学の弊害がどこにあるのかを平易に示そうとしている。機械論を基礎に幾何学を模し、法理の殻に閉じこもったまま、現実との接点を持つとうとしない法学のありようは、いくら最高裁の権威をまとってみても、不毛の結果を生み出すに過ぎない。それは、生き物を研究対象にし

ロスコー・パウンドのプラグマティズム法学—植物学研究から法学研究へ—

ながら、生物の器官は少しも調べようとしなかったリンネの博物学研究と同じで、法学においても、古びた形式主義を維持するだけのものと化している。これこそ、まさに科学であることがその実用目的を離れてしまい、科学のための科学に陥ったことを裏づけている。その結果、自由を維持するための法が、肝心の自由を台無しにする状況に到ってしまった。法理の一貫性は、法の適切な運用と、役人の気紛れを抑えるためには重要であっても、その狙いを超えて技巧ばかりが過度に偏愛されれば、逆に大きなマイナスとなりかねない。これこそ、柔軟さを失った機械論的法学がもたらす弊害に他ならないとパウンドはいう。

これまでのロスコー・パウンド研究は、彼が法学に転じ「機械論的法学」を著したところから始まるのを常としてきた。このため、法学者になる以前、彼が植物学研究を通じ身に着けたものはほとんど未知のままに残され、彼が唱えるプラグマティズム法学の発想がどこから生じたのか必ずしも明らかではなく、ジェームズらの唱えた考えを受け継いだものと思われがちであった。

だが、パウンドの知られざる植物学研究の一端を覗いてみると、そこには彼が法学研究に転じた後に唱えた考えとの間に、共通性が色濃く表れていることが分かる。それは、19世紀末における新たな知的動向として「形式主義への反乱」が起きる中で、パウンドは、ベッシーの下でダーウィンの影響を受けて始まった新たな植物学研究を通じいち早くその手法を身に着け、そこで会得したものを、後に法学研究に応用し、法のプラグマティズムを提唱しようとしたことが窺われる。そうであれば、ジェームズが生理学、心理学を通じてプラグマティズムを唱えるに到ったことと並行する形で、パウンドの唱えたプラグマティズム法学は、彼が植物学研究を通じて会得した視点を、法学研究に応用した成果であったことになろう。いずれの背後にも、当時の知的動向が深く絡んでいる。パウンドのこの努力により、諸学が次々と大きく変革してゆく中で、その「最後尾に位置」していた法学にも、新たな成果がもたらさ

れることになった。

- 1 ビーター・ボウラー／小川真理子ほか訳『環境科学の歴史』I, pp. 47-49 (2002, 朝倉書店). 荒俣宏『大博物学時代：進化と超進化の夢』(1982, 工作舎).
- 2 リン・バーバー／高山訳『博物学の黄金時代』pp. 17-18 (1995, 国書刊行会). 「神が創造された完全な財産目録を作るのは人間に課せられた使命ではないか」というわけで、一般に博物学は収集と分類、そして美しい展示という道楽としてひろまった。長いあいだ動植物の分類基準は定まらなかったが、スウェーデンのカール・フォン・リンネ (1707-78) が考案した属と種の二名表記による人為分類法はたちまち全ヨーロッパに普及して「神が創造し、リンネが分類する」と称えられるほどだった。」吉川惣司・矢島道子『メアリー・アニングの冒険：恐竜学を開いた女化石屋』p. 47 (2003, 朝日新聞社).
- 3 荒俣博『大博物学時代』
- 4 バーバー／高山訳『博物学の黄金時代』p. 119. 「1840年以降の博物学書で挿絵の入っていないものを見つけるのは難しい。最廉価本ともなれば下手糞な木版画二、三葉というようなこともあったが、1850年代にラヴェル・リーヴが刊行した半ギニーのすばらしい『大衆博物誌』叢書だとか、ウィリアム・ジャーダインの叢書『博物学文庫』といった中程度の本では、多色刷りで良い絵が沢山入っていなければもはや話にならなかった。」
- 5 Agassiz, *Essays on Classification* (1962, Harvard).
- 6 リン・バーバー／高山訳『博物学の黄金時代』pp. 273-74.
- 7 西村三郎『文明のなかの博物学』上 p. 29 (1999, 紀伊国屋書店). 19世紀における博物学から近代生物学への変身が、西欧世界においてしか起きなかったことも注目される。西村『同』上 p. 234. 「自然の三つの世界〔動物界、植物界、鉱物界〕に関し、包括的かつ合理的な分類システムを作ろうと、最も精力的な試みがなされたのは、18世紀であった。とりわけ、スウェーデンの博物学者カール・リンネ (1707-78) の実り豊かな分類法は、種 species は時を超越し変化しないという非進化論的な non-evolutionary 仮定を基礎として、植物の生殖器官を、比較的「自然な」分類システムの基礎に用いた試みである。」Roy Porter, *Classification, in The Companion to the Enlightenment*, Yolton ed., p. 91.
- 8 西村三郎『文明のなかの博物学』pp. 368-69.
- 9 西村三郎『文明のなかの博物学』p. 369.

- 10 西村三郎「文明のなかの博物学」p. 433. ジョルジュ・カンギレム / 杉山訳「生命科学の歴史：イデオロギーと合理性」pp. 93-120. (2006, 法政大学出版).
- 11 西村三郎「文明のなかの博物学」p. 417. これに伴い、エリートの間では批判にさらされていたリンネが、平民の気取りのない口で語ったこともあって、民衆の間では再度その人気を取り戻し、ビュフォンの一人息子は、父親が旧体制下の貴族で、しかもリンネの敵対者であったがために処刑される中で、仇敵ビュフォンが君臨していた王立植物園には、リンネの胸像まで建てられるという皮肉な結果も見られたという。同 pp. 420-25.
- 12 博物学から生物学への動きについては、ミシェル・フーコー / 渡辺・佐々木訳「言葉と物」第5章「分類すること」(1987, 新潮社)を参照。実証化に向けた専門的研究の動きの中で、とりわけ注目されるものがドイツの大学における改革である。実証的な科学研究は、単なる観念論や空想だけで可能になったものではなく、実際にそれを可能にする制度的整備を必要とした。このドイツでの改革は、南北戦争以後のアメリカにおける大学改革にも大きな影響を及ぼした。例えばバウンドも、彼の師であったチャールズ・ベッシーも、植物学研究においてはドイツの影響が顕著に見られる。レッセ・フェールの経済思想を批判し19世紀末に隆盛した革新主義者においても、19世紀末に「アメリカ経済学会」の設立に到ったタウシッグやセリグマンなど、当時の若手の経済学者は、その多くがドイツ留学組であった。一方、生理学、心理学の研究でもウィリム・ジェイムズやポールドマンがドイツ留学を経験している。Hovenkamp, *Enterprise and American Law 1837-1936*, Ch. 12. Daniel J. Wilson, *Science, Community, and the Transformation of American Philosophy, 1860-1930*, p. 78 (1990, Chicago). また、ドイツの大学改革については、次のような指摘も見られる。西村三郎「文明のなかの博物学」p. 438. 「研究者としての身分が社会的に保証され、職業人としての意識が自覚されるに伴って、研究の姿勢や方法も変わってくるのは、当然だろう。自分の宗教的信念や個人的な好みを優先させ、学界の動向を無視して気ままに研究をすすめることは、もはや許されない。自分のポスト、あるいは支払われる給料に見合った、しかも時流に沿った研究成果を挙げることが、必要である。[…その結果]大理論の構築よりも着実な観察と実験的研究、あるいは個別的な事実の発見、なによりも、確実に実証的な成果を出すことに意義を見出すようになる。」
- 13 http://www.botany.org/awards_grants/detail/bessey.php
- 14 Robert Bruce, *The Launching of Modern American Science 1846-1876*, p.

98. (1987, Cornell). R. Overfield, Charles E Bessey: The Impact of the "New" Botany on American Agriculture, 1881-1910, 16 Technology and Culture, pp. 163-64 (1975).
- 15 David Wigdor, Roscoe Pound: Philosopher of Law, pp. 18-21. (1974, Greenwood). [以下 Wigdor, Roscoe Pound と略す]
- 16 Wigdor, Roscoe Pound, pp. 21-22.
- 17 Wigdor, Roscoe Pound, pp. 22-23.
- 18 ベッシーが1880年に出版した「ハイスクールとカレッジのための植物学」は、近代科学文献の一つの時代を画するものとされる。ベッシーのこの書の序文に、ドイツ人ザックスの研究書に負うところが多いことと並び、師のエーサー・グレイへの謝辞が見られる。Charles Bessey, Botany for High Schools and Colleges, 2d. v. (1881, Henry Holt, 2011, LaVergne ed.).
- 19 Wigdor, Roscoe Pound, p. 23.
- 20 リン・バーバー / 高山訳「博物学の黄金時代」 pp. 19-21によれば、学校教育でも科学が目敵にされがちであった時代には、イギリスでも「顕微鏡の夕べ」と称し、この顕微鏡という道具は、科学研究よりも大人の間での一種の娯楽の道具として扱われていたという。
- 21 リン・バーバー / 高山訳「博物学の黄金時代」 pp. 72-73
- 22 博物学を背後から支えてきたものは、はるか古来より延々と受け継がれてきた「存在の連鎖」という観念である。アーサー・ラブジョイ / 内藤訳「存在の大いなる連鎖」(1975, 晶文社)、西村三郎「文明のなかの博物学」p. 40. (1999, 紀伊国屋書店)。「ビュフォンは、自然の構造・あり方について、当時の多くの知識人たちと同様、〈存在の連鎖〉的な考え、すなわち、この世界に存在する物は最上位のものから最下位のものまですべてが、微妙な差違をもって順次鎖のように連なっているという思想に傾いていたらしい。この考えはもともと〈自然の階梯〉と呼ばれ、古代ギリシアのアリストテレス以来いわれてきたことで、近世に入ってからそれがさらに拡張されて、この宇宙にはありとあらゆる移行段階を含む万物が存在する、世界はそうした万物によってすき間なく満たされているという、いわゆる〈充満の原理〉に発展するが、ビュフォンもその考えに与していた一人だったようである。」
- 23 リン・バーバー / 高山訳「博物学の黄金時代」 p. 61.
- 24 Charles E. Bessey, Evolution and Classification, Botanical Gazette, p. 329. (1893).

DigitalCommons@University of Nebraska-Lincoln. <http://digitalcommons.unl.edu/bioscisystematics/8>

25 Id.

26 R. Overfield, Charles E Bessey: The Impact of the "new" Botany on American Agriculture, 1881-1910, 16 Technology and Culture, pp. 164-65. (1975).

27 「生物学」なる名称を提唱したのは、ドイツのトレヴィリヌスとフランスのラマルクで、ともに1802年のことであったという。西村三郎『文明のなかの博物学』p. 448. 生物進化論で有名ななかのチャールズ・ダーウィンも、今では生物学者の代表格として受け止められているが、若い時代には自らを博物学者と名乗っている。ダーウィン『ビーグル号探検記』（岩波文庫）。

28 西村三郎『文明のなかの博物学』pp. 448-49. 植物研究は、日本では昔から「本草学」として知られてきたが、西洋の博物学が19世紀に生物学に変化したのに対し、日本の本草学は生物学に転じることはついぞなかった。博物学から近代生物学への変化は、ヨーロッパのキリスト教文化圏のみ起きた現象であるという。西村三郎『同』p234. 「東アジアでは、中国においても日本においても一個の意志的な人格神による世界創造という考え方はもともとなかった。ここでは、万物は混沌からひとりでに"成る"ものだった。… [日本では] 神も人間も含めて、万物が自然に"成った"とされる。したがって、そこでは山川草木・鳥獣虫魚のすべてが人間と同類である。人間に靈魂があるように、それらのすべてにも靈魂が宿っている。そして、それらのうちで人間の能力を超えた物、畏怖すべき物が神として崇められた。西欧キリスト教世界では、神と自然と人間とが厳然と区別されるのに対し、ここでは神・自然・人間は連続しており、いわば一体となっている。そのようにして成った世界は、万物が自由に交感し合い、入りまじり合う、高度にアニミスティックで呪術的な世界である。」西村三郎『同』pp. 574-76

29 「学界においては〈性体系〉に代わるべき新しい植物分類=自然分類の体系が多くの研究者によって熱心に模索され、18世紀末から19世紀にかけて具体的な案が次つぎと提示されて、近代植物分類学の展開へと連なっていくことになる。だが、一般社会では、〈性体系〉を中心としたリンネ流の博物学が、その創始者の没後も依然として幅をきかせ続けるのだ。大衆の心をつかんで、むしろますます盛んになったといってもよい。このことは、世紀が変わっても、いや19世紀を迎えてなおさら、大衆向けのリンネ流博物学・植物学の解説書

や注釈書がさまざまに趣向を凝らしながら数多く出版されるようになったという事実からも、知ることができよう。」西村三郎『文明のなかの博物学』p. 415.

30 「かつて、ジュシューが自然的システムを考案してから30-40年経っても、植物学者たちは、一団となって依然リンネの人工的システムに固執していた。今、われわれはそれから60年の時を経て、リンドリー、トーレイ、ベック、グレイらが目の当たりにした問題と似たものに直面している。歴史は、まさに繰り返すものである…。ジュシューとド・カンドルの〔自然的〕システムは、60年前のリンネがそうであったのと同じく、今や高等植物の植物組織学のsystematic botanyにとってお荷物になっている。今も昔も、これは保守主義の精神によるもの、かつて敬意が払われていた慣例への恭順がもたらす悪夢によるものだ。」Charles E. Bessey, *Evolution and Classification*, *Botanical Gazette*, p. 331. (1893). ここでベッセイが挙げているジュシュー、ド・カンドール、リンドリーらが自然的分類体系の構築に尽力した博物学研究者であることについては、西村三郎『文明のなかの博物学』第7章を参照。

31 Charles Bessey, *Botany for High Schools and Colleges*, 2d. iii. (1881, Henry Holt).

32 Charles E. Bessey, *Science and Culture*, *Science*, 121. (1896). DigitalCommons@University of Nebraska-Lincoln. <http://digitalcommons.unl.edu/bioscisystematics/14>

33 リン・バーバー / 高山訳『博物学の黄金時代』p. 419. 機械論と生氣論との関係については、T・Sホール / 長野訳『生命と物質』下巻第5部 (1990, 平凡社) ならびに廣野・市野川・林編『生命科学の近現代史』(2002, 勁草書房) を参照。

34 アレン『ナチュラリストの誕生』p. 320.

35 今では電子図書が普及し、パウンドのこの書が(第二版) インターネットを通じ全ページ閲覧可能になっている。

<http://www.archive.org/stream/phytogeographyn00poungoog#page/n56/mode/2up>

36 E. Nobleman, Review of Roscoe Pound, *Treatise on Jurisprudence*, 10 *American law Review*, 179 (1961), 181.

37 Wigdor, *Roscoe Pound*, pp. 10-11.

38 Nobleman, Review of Rpocoe Pound, *Treatise on Jurisprudence*, 10 *American law Review*, 182. Wigdor, *Roscoe Pound*, pp. 11-13.

- 39 ロスコーが学部を出た後、法の勉強を手がけるようになってからは、父のステューブスがブラックストーン「コンメンタリー」を使い、法律の手ほどきもしている。Wigdor, Roscoe Pound, p. 27.
- 40 Wigdor, Roscoe Pound, p. 27.
- 41 Wigdor, Roscoe Pound, p. 29.
- 42 Wigdor, Roscoe Pound, p. 31.
- 43 Wigdor, Roscoe Pound, p. 31. Nobleman, Review of Roscoe Pound, Treatise on Jurisprudence, 10 American University law Review, 182. (1961)
- 44 Wigdor, Roscoe Pound, pp. 34-47.
- 45 Wigdor, Roscoe Pound, p. 50.
- 46 Wigdor, Roscoe Pound, p. 29.
- 47 Charles E. Bessey & Roscoe Pound, Botanical Survey of Nebraska (1892, Lincoln) (2011, Kissinger). この書物は、「ネブラスカ大学植物学セミナー」の名で出版されており、その顧問委員の中に植物学教授としてチャールズ・ベッシーの名が記され、セミナーのメンバーが列記されている中の一人に、クレメンツとともに Roscoe Pound, M. A. の記載が見られる。
- 48 Pound & Clements The Phytogeography of Nebraska, Part 1: General Survey Intro, ix. (1898, Jacob North & Co.) (2010, Kissinger.)
- 49 Wigdor, Roscoe Pound, p. 55. パウンドとクレメンツの植物学研究については、ピーター・ボウラー／小川眞理子ほか訳『環境科学の歴史』Ⅱ, pp. 271-73 (2002, 朝倉書店) を参照。ここでの記述は、もっぱら、後に植物学者として活躍したクレメンツにウエイトが置かれているが、植物学者ロスコー・パウンドに関する記述が現れる数少ない資料の一つである。また廣野・市野川・林編『生命科学の近現代史』(2002, 勁草書房) pp. 245-46 には、クレメンツが20世紀初めのアメリカにおいて植物学研究の第一人者になったことが記されている。
- 50 Pound, The Plant-Geography of Germany, 30 The American Naturalist, p. 465 (1896).
- 51 Pound, The Plant-Geography of Germany, 30 The American Naturalist, p. 465. 植物地理学の創始者はアレクサンダー・フォン・フンボルトとされる。18世紀に世界規模で植物分布の研究が行われた際に、彼は南米旅行(1799-1804)で収集した豊富な情報を参考に、物理的環境がいかにして植物の地理的分布を決定づけたかを研究し始め、山を登るにつれ高度の違いで見られる植生の違い

から、植生帯と地球をとりまく地理学的地帯との間に等価関係があることを察知した。環境が動植物にどう作用するのかに関する彼の見解は、人間社会がその土地の状況にどう順応したかを研究したことから影響を受けた可能性もあるという。ピーター・ボウラー / 小川真理子ほか訳『環境科学の歴史』 I, pp. 193-94 (2002, 朝倉書店)

52 Pound, The Plant-Geography of Germany, 30 The American Naturalist, pp. 465-66.

53 Pound, The Plant-Geography of Germany, p. 466

54 Pound, The Plant-Geography of Germany, p. 465

55 Roscoe Pound & Frederic Clements The Phytogeography of Nebraska, Part 1: General Survey, iv.

56 Pound, The Plant-Geography of Germany, p. 468

57 Pound, Liberty of Contract, pp. 456-57. バウンドは、17-18世紀における英米の法学が、国家や政府からの自由を基調としたことから、そのベースには極度の個人主義が据えられてきたため、法学における思考形態も、抽象的な人間の本性に関する定義からの演繹スタイルが採られるに到ったことを批判している。バウンドによれば、19世紀末のアメリカで盛んに使われた「契約自由の原則」の法理は、アダム・スミスの政治経済学に端を発し、ミルの政治経済に関する見解を経て、スペンサーにより正義の原理から演繹されるに到ったものである。これは、政府の権力を最小限に抑え込もうとした考えによるもので、契約によって作られた義務を法により強制することが政府の役目になった。だが、これらイギリスの個人主義者たちの仕事が、人類の進歩を妨げる一連の古びた諸制度を廃止することにあつたことが思い起こされねばならない。契約の自由は、この目的を達成するためには最良の手段であつたが、彼らは、これを手段として採用しながら、しまいにはこれを目的としてしまったという。

58 この点で、バウンドが団体の扱いを巡り、ドイツの法学者ギールケの考えを高く評価していることが注目される。バウンドは、それまでのアメリカでギールケは非常に誤解されてきたと言い、ギールケの功績をあくまで団体を自然な存在として認めた点に見出そうとしている。個人主義的な視点に立てば、集団や法人はあくまでそれに対応する実体を欠くためにフィクションと見がちであるが、バウンドはこうした見方を批判する。法学はそもそも認識の学ではなく、紛争解決の手段を提供するものであるから、集団の扱いにおいても、それを権利義務の帰属点として自然な存在とすることに、何ら不都合はないという。社

会学的に考えれば、産業社会においては、会社をはじめ各種の集団を法的な権利義務の帰属点としては「实在」として扱うのが自然であり、かつ便利であって、それを敢えてフィクションなどと強弁する必要はないという。これが、ギールケに対する正当な評価か否かはさておき、パウンドのこの見方は、必ずしも法学研究の範囲内だけで、ドイツの思考の影響と考えるより、彼がすでに植物学研究において身に着けた視点の延長線上に、群生する植物と同じ要領で人間社会を見ようとしたと考えることが可能であろう。

59 Roscoe Pound & Frederic Clements *The Phytogeography of Nebraska*, Part 1: General Survey (1898, Jacob North & Co.) (2010, Kissinger.).

60 Wigdor, Roscoe Pound, p. 55.

61 Wigdor, Roscoe Pound, p. 55. Pound & Clements *The Phytogeography of Nebraska* の表紙の裏には次の記載が見られる。'Presented to the Faculty of The University of Nebraska as a thesis for the degree of Doctor of Philosophy by Roscoe Pound, A. B., 1888, A. M., 1889, and Frederic E. Clements, B. Sc., 1894, A. M., 1886. Accepted May 12, 1897.' なお、クレメンツへの学位授与は、手続上のもつれから1年遅れたという。

62 Elizabeth Britton, *The Phytogeography of Nebraska*, SCIENCE, New Series, Vol. 8, No. 184. (July 8, 1898), pp. 53-55. <http://digitalcommons.unl.edu/cgi/viewcontent.cgi?article=1004&context=bioscifacpub> による

63 Britton, SCIENCE, New Series, Vol. 8, No. 184. (July 8, 1898), pp. 53-54.

64 『ネブラスカの植物地理学』の構成は、5章からなる。第1章は、同州の植物地理学、地質学、気象学が取り上げられる。第2章では、地域境界 regional limitations を、同州の四つの地域立木森 wooded bluff と牧草地帯、大草原地帯、砂丘地帯、丘地帯に分けて統計学的に示される。第3章では、異なる形態を持つ植物をそれぞれ樹木 woody plants と草本 herbs の項目下に分けた上で、各々が保身と生殖のために持つ諸種の習性・工夫が、その生育地域との関係で考察される。本章の結論部で、保護機能、開花の時期、生殖・増殖を巡るさまざまな生物学的特徴が論じられる。第4章は、植物の自然のグループ間の諸関係を、習性に従い6グループに分けて取り上げ、そのそれぞれの自然の科 family を表にして示し、異なる地域に生育する種の数が提示される。最後の第5章では、植物群落 plant formations が扱われる。こうした群落は、自然地理学的 physiographical, 気象学的現象に結実するような諸力から生じる、生物学的 コミュニティーを表しており、この群落が一定地域に広がる植物組織に特徴的

な群集により定められる限りで、生育植物群として定義されうる。その境界線は、自然地理学的なものではなく、生物学的のものであって、ほぼ一定の自然的境界により定まる。この章が、おそらく本書で最も読み応えのある部分となっており、これまでなされた観察のすべての結果とその効果が、ここに要約されている。

- 65 Wigdor, Roscoe Pound, p. 24
- 66 ビーター・ボウラー / 鈴木ほか訳「進化思想の歴史」上 pp. 22-23. (1987, 朝日選書).
- 67 リン・バーバー / 高山訳「博物学の黄金時代」 p. 73.
- 68 Pound & Clements The Phytogeography of Nebraska, Part I: General SurveyIntro, ix. (1897, Lincoln) (2010, Kissinger.)
- 69 Pound, Mechanical Jurisprudence, 8 Columbia Law Review, 605, p. 605 (1908)
- 70 Pound, The Scope and Purpose of Sociological Jurisprudence, 24 Harv. L. Rev. 591, p. 598. (1911).
- 71 Pound, Mechanical Jurisprudence, 8 Columbia Law Review, p. 605
- 72 Pound, Liberty of Contract, 18 Yale Law Journal, 454, p. 467. (1909).
- 73 Pound, Mechanical Jurisprudence, 8 Columbia Law Review, pp. 606-07.
- 74 本稿73頁注30. Charles E. Bessey, Evolution and Classification, Botanical Gazette, p. 331. (1893).
- 75 Pound, Mechanical Jurisprudence, 8 Columbia Law Review, pp 608-09
- 76 西村三郎「文明のなかの博物学」 p. 403. 「〈性体系〉を構築したさいのリンネの基本的な姿勢は…本質主義と規定できるだろう。つまり、ある物を認識するには、その物の持つ属性によるわけだが、そもそも属性には本質的属性と非本質的属性とがある、物を正しく見分けるには、非本質的属性ではなく、本質的属性によらなければならぬとするのが、この主義の立場だ。リンネは生殖器官をもって植物の本質と見、それにもとづいて〈性体系〉を構築したのだが、生殖器官を本質とみなす考えには、なにも経験上あるいは科学上の厳密な裏づけがあったわけではない。… [それは] あくまでリンネが頭のなかでアプリオリにまとめあげ、つくりあげたアイデアにはかならなかった。その意味で彼の体系は先験的な本質主義にもとづくもの、しかもその根拠として宗教上の真理を持ち出している点で、超越的でもあったということが出来る。」
- 77 ホームズ裁判官は、この経済理論に対し、ロックナー事件の最高裁判決にお

ける有名な反対意見の中で、これはアメリカ人の多くが支持しない理論であると言いつけている。

78 Perry, *Elements of Political Economy*, p. 129.

79 *Ibid.*, p. 134; Sidney Fine, *Laissez Faire and the General-Welfare State* (Ann Arbor: University of Michigan Press, 1964), p. 53.

80 See Wayland, *Elements of Political Economy*, pp. 155-157. (1837, Leavitt Lord & Co.). Perry, *Elements of Political Economy*, pp. 129-32. (1866, Charles Scribner & Co.)

81 Perry, *Elements of Political Economy*, pp. 199-200.

82 *Ibid.*, p. 143.

83 Morgan Cloud, *Law in Theory, Law in Practice: Roscoe Pound's PRACTICAL PROGRAM OF PROCEDURAL REFORM*, GREEN BAG · AUTUMN 1997, P. 74.

84 Pound, *Mechanical Jurisprudence*, 8 *Columbia Law Review*, pp 609-10. パウンドの社会学的法学は、彼が法学研究に転じた20世紀になって唱えられたものであるが、その先駆的業績を残し、「法社会学」なるものの生みの親として名高い、19世紀末オーストリアの法学者であった、オイゲン・エールリッヒである。後に、彼の大著「法社会学の基礎理論」が英訳された際に、パウンドはそれに序文を寄せている。エールリッヒは、いわゆる19世紀ドイツにおける自由法運動の一人として、ローマ法を用いたドイツにおける統一法への動きに強力に反対した人物であった。動機は複雑で様々あったにせよ、その一つが、異国の法を用いてドイツ統一を試みることへの批判である。そこで、彼の持ち出した概念が「生ける法 living law」である。

85 「自然科学の分野ですでに達成された変化の影響は、最も遅れた学問…である法律学にもやっと及んできた。…新しい法学は、これまで理解できなかった法と制度の本質の多くを分らせてくれるだけではなく、疑いもなくそれは実用的に利用できる成果をももたらすことであろう。」エールリッヒ著 / フーブリヒト・河上訳『法社会学の基礎理論 (1913)』pp. 3-4 (1984 みすず書房)

86 Wigdor, *Roscoe Pound*, pp. 183-205.

87 Pound, *Mechanical Jurisprudence*, 8 *Columbia Law Review*, pp. 615-16.